

横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書

平成元年度

よこしば さん ふうばやま
横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書

平成元年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県には2万か所にのぼる多数の遺跡が所在していますが、その中で縄文時代以降の貝塚は647か所確認されています。これらの貝塚は所在数、個々の規模などにおいて全国有数の内容を持ち、地域の歴史、文化を解明する上でも貴重なものですが、一部の著名な貝塚を除いては実態の明らかにされた例は数少ないのが実情です。

このため、千葉県教育委員会では昭和63年度から国庫補助を受けて、貝塚のうち重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしていくことになりました。

今年度は、山武郡横芝町に所在する山武姥山貝塚の調査を実施しました。その結果、新たに2か所の貝層が発見され、環状貝塚の全体像が明らかになるとともに、縄文時代晩期の集落跡の存在が確認されるなど、大きな成果が得られました。

このたび、その成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術的資料として、また文化財の保護、活用のための資料として、広く一般の方にも利用されることを願ってやみません。

終りに、文化庁を始め、横芝町教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心からお礼申し上げます。

平成2年3月31日

千葉県教育庁文化課長 福田 誠

例 言

1. 本書は、千葉県山武郡横芝町姥山字台241ほかに所在する山武姥山貝塚の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚確認調査の第2年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査は、平成元年9月18日から同年10月17日まで実施した。
4. 調査は、財団法人千葉県文化財センター研究部において、部長堀部昭夫、部長補佐渡辺智信の指導のもとに、主任技師蓑淳一が担当した。なお、主任技師大野康男の協力を得た。
5. 本書の原稿執筆は蓑淳一が行った。
6. 調査に当たっては、所有地の発掘を快く御承諾くださった伊藤一良、伊藤喜市、伊藤利雄、土屋守、堀越一雄、堀越四郎の各氏から多大の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
また、横芝町教育委員会の関係者各位、区長の伊藤雅悦、小川秀男の両氏を始めとする姥山地区、遠山地区の皆様からも多くの御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
7. 現地調査から報告書執筆にいたるまで、下記の諸氏から多くの御教示、御指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。
小宮孟、柴田徹、鈴木公雄、土屋長八
8. 本書の遺物実測図の縮尺は下記のとおりである。
土器・土器片利用円盤類・土器片錘 1／3 土製品 1／2
玉類 1／2 石器 1／2 骨器 2／3
9. 本書では、国土地理院発行の1/50,000地形図（成田・東金）及び千葉県の成田都市計画図36（1/2,500、トレースして改編）を利用させていただいた。
10. 山武姥山貝塚の遺跡コードは、408-009である。

目 次

序

例 言

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 調査の概要	3
1. 立地	3
2. 調査の方法と経過	5
3. 各トレンチの状況	7
III. 遺構	13
IV. 出土遺物	16
V. まとめ	39
1. 山武姥山貝塚の発見と発掘	39
2. 既応の調査及び今回の調査の成果	39
3. 貝塚の現状	41
4. 貝塚の範囲と内容	42

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡図	2	第14図 1 T - B 土器拓影図 3	24
第2図 周辺地形図	4	第15図 1 T - B 土器片利用円盤類・ 土器片錘実測図	25
第3図 1 T 平面・土層断面図	8	第16図 1 T - B 土製品・玉類・ 石器実測図	26
第4図 2 T 平面・土層断面図	9	第17図 1 T 土器拓影図 1	27
第5図 3 T 平面・土層断面図	10	第18図 1 T 土器拓影図 2	28
第6図 4 T 平面・土層断面図	12	第19図 1 T 土器拓影図 3	29
第7図 1 T - A 土器拓影図 1	17	第20図 1 T 土器拓影図 4	30
第8図 1 T - A 土器拓影図 2	18	第21図 1 T 土器拓影図 5	32
第9図 1 T - A 土器拓影図 3	19	第22図 1 T 土器片利用円盤実測図	33
第10図 1 T - A 土器片利用円盤実測図	20	第23図 1 T 土製品・玉類・石器実測図	34
第11図 1 T - A 土製品・石器実測図	20	第24図 2 T 土器拓影図	35
第12図 1 T - B 土器拓影図 1	22		
第13図 1 T - B 土器拓影図 2	23		

第25図	2 T土器片利用円盤類・ 骨器実測図……………36	第27図	4 T土器拓影図……………37
第26図	3 T石器実測図……………36	第28図	4 T石器実測図……………38
		折込付図	山武姥山貝塚地形図……………巻末

図版目次

図版 1	1. 貝塚の所在する台地（東から）	2. 貝塚遠景（北東から）
図版 2	1. 1 T全景（北から）	2. 1 T 1の3層上面（南西から）
図版 3	1. 1 T-A遺物出土状況（北から）	2. 1 T-A掘上がり全景（北から）
図版 4	1. 1 T-B遺物出土状況（北から）	2. 1 T-B掘上がり全景（北から）
図版 5	1. 2 T全景（南から）	2. 2 T 1・2の3層中貝集中（南西から）
図版 6	1. 3 T全景（南東から）	2. 3 T土坑掘上がり全景（南から）
図版 7	1. 4 T 1～7（南西から）	2. 4 T 7～13（北西から）
図版 8	1. 4 T 14～20（東から）	2. 4 T 20～26（北東から）
図版 9	1. 4 Tの柱穴列（東から）	2. 4 T柱穴列の炭化柱（東から）
	3. 貝塚説明板（北西から）	
図版10	出土遺物（土器1）	
図版11	出土遺物（土器2）	
図版12	出土遺物（土器3）	
図版13	出土遺物（土器4）	
図版14	出土遺物（土器5）	
図版15	出土遺物（土製品・玉類・石器）	

I 遺跡の位置と環境

山武姥山貝塚は、千葉県北東部の太平洋に面した九十九里地方のほぼ中央に位置する山武郡横芝町の姥山字台241他にある。横芝町の中では北西部に当たる。ただし、姥山に所在するのであるが、姥山の集落からは南に離れ、貝塚のある台地のすぐ下は遠山の集落である。

字名から知られるように、貝塚は東へ向って突き出た小台地の先端上に入り、その下に入り込んでいる小さな谷津からは、わずかで九十九里平野である。一方貝塚の小台地は、北総台地を構成する、現在の新東京国際空港付近から南東へ向って突き出た幅3～4km、長さ15km前後の大きな舌状台地の一画で、この舌状台地の東側を栗山川とその支流の高谷川が、西側を木戸川が流れる。

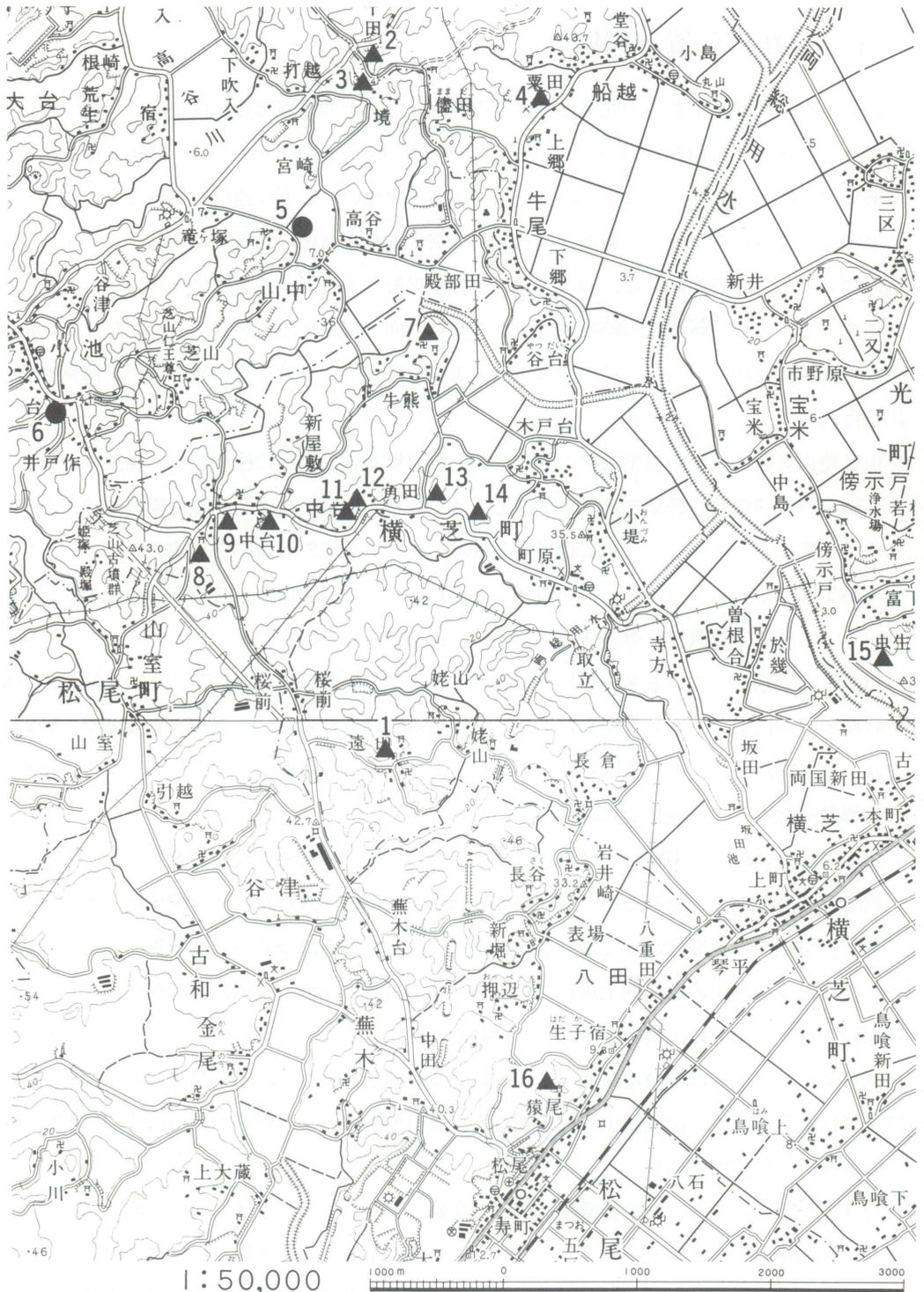
山武姥山貝塚は、慶応義塾大学の5回にわたる発掘調査と今回の確認調査の結果を合わせると、縄文時代前期から晩期にわたる遺跡と考えられる。前期から晩期の各時期の周辺の遺跡を拾うと多数にのぼるので、ここでは貝塚と貝塚ではないが晩期の遺跡を周辺の遺跡から拾いだして第1図に落としてみた。三角が貝塚、丸が貝塚ではない晩期の遺跡である（千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』（2）昭和61年）。

貝塚を時期別にみると、早期の貝塚は4と15で、前期の貝塚は3で、1の山武姥山貝塚も貝塚形成が前期に始まる可能性がある。3も黒浜式からである。また、3も前期から晩期まで続く。中期から後期の貝塚は多く、8～14である。後期の貝塚は2・7であるが、7は晩期の土器散布地を伴う。後期から晩期の貝塚は16である。

貝塚ではない晩期の遺跡の5は丸木舟の出土地点、6は後期から晩期の遺跡である。

貝塚の時期毎の分布をみると、早期の4と15は栗山川の形成した大きな沖積地に面する。ところが、中期から後期にかけての貝塚は栗山川へ注ぐ小河川につくった小支谷に面するものが多い。また、栗山川の比較的上流にある。山武姥山貝塚の北側に東西に貝塚が連なっているのは注目される。山武姥山貝塚はそれらとは離れて存在するのも注意される。後期から晩期には貝塚は栗山川の大きな沖積地に面するようになる傾向がみられる。それにしても、栗山川の流域に貝塚が集中して、山武姥山貝塚のある大きな台地を挟んで西側の木戸川の流域に貝塚が無いのは極めて対照的である。

貝塚の性質をみると、1の山武姥山貝塚が主鹹で、ハマグリが主体、3が主鹹でハマグリ・キサゴが主体、7が主鹹でハマグリ・ヤマトシジミが主体、9が主鹹でハマグリが多く、11が半鹹・半淡でハマグリ・アサリが主体、14が主鹹でハマグリ・アサリ・キサゴが主体、16が主鹹でキサゴが主体である（千葉県教育委員会『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』昭和58年）。また、8の土坑内の貝層については詳細な分析報告がある（千葉県文化財センター『主要地方道成田松尾線』V、昭和62年）。



1. 山武姥山貝塚 2. 千田貝塚 3. 境貝塚 4. 戸上台貝塚 5. 高谷川低地遺跡
 6. 井戸作遺跡 7. 牛熊遺跡 8・9. 中台貝塚 10. 中台A遺跡 11. 鴻巣貝塚
 12. 角田貝塚 13. 木戸台第2貝塚 14. 木戸台第1貝塚 15. 虫生遺跡(地点貝塚)
 16. 猿尾貝塚

第1図 周辺遺跡図 (1/50000)

II 調査の概要

1. 立地 (第1・2図、折込付図、図版1)

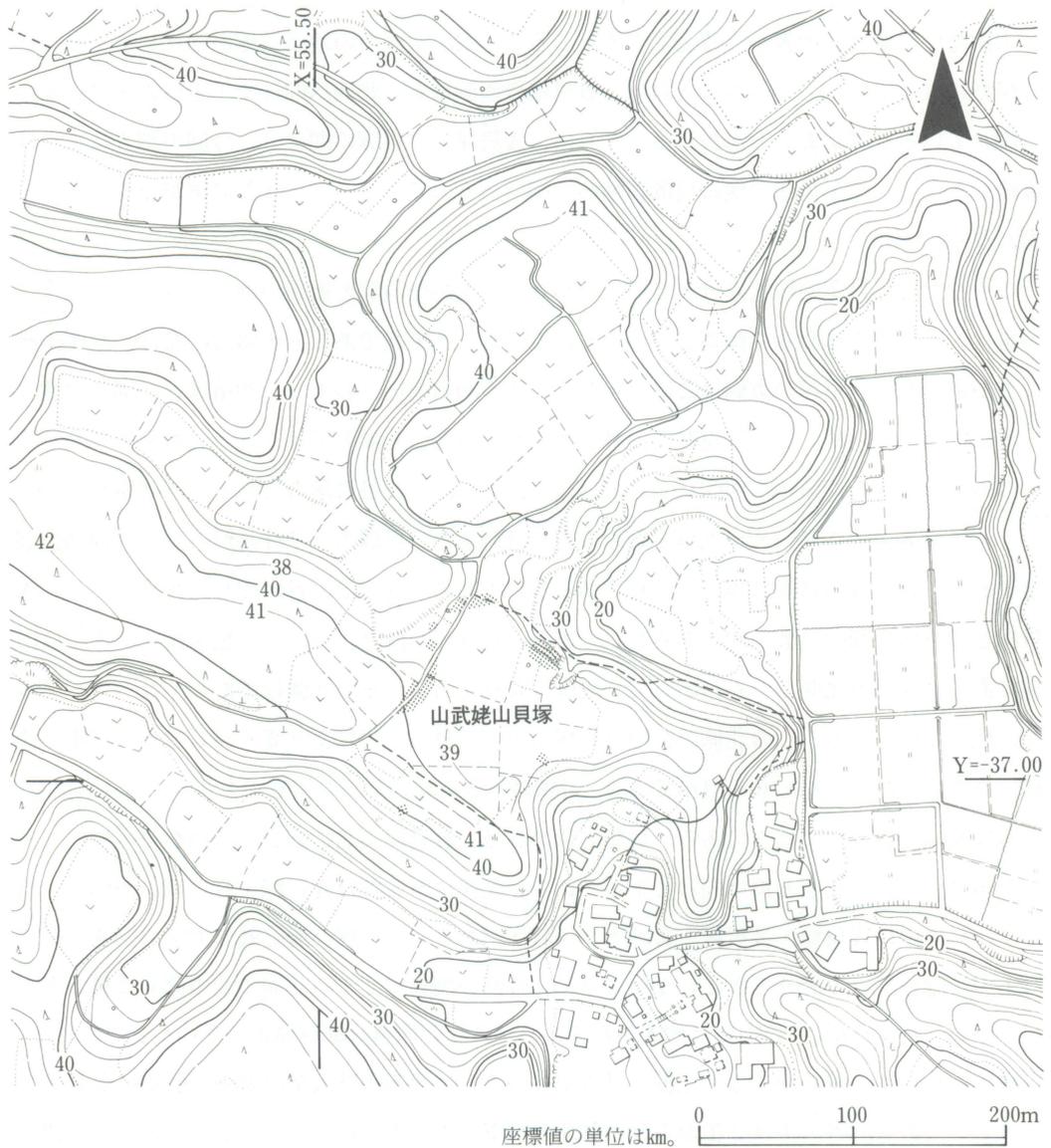
山武姥山貝塚は、北総台地の東のへりに位置する。西は延々と台地が続き、東は急な斜面から九十九里平野へと続く谷になっている。この谷を下れば九十九里平野まで2 kmほどである。この谷は、縄文時代には貝・魚を採りに栗山川流域、九十九里海岸へと出かける通路であったと思われる。貝塚の標高は35~41mであるのに対して、東側の谷の標高は13~14mである。現在、貝塚一帯は、北側のC貝塚のところが山林のほか広く畑になっている。東側の谷は水田になっている。

山武姥山貝塚は、地表から確認できるところで、大小7個所の地点貝塚が環状にめぐっている格好になっている。この他にA貝塚・B貝塚の西側にある北西へ向って下る谷の中には土中に隠れている貝塚があると思われるとともに、A貝塚とア貝塚の間には、今回の調査時点では痕跡しかなかったY貝塚の他に貝散布地が2個所あるので、古くは小さな貝塚が並んでいたと思われる。

こうした地点貝塚の環状の分布とのつながりで山武姥山貝塚と周辺の地形をみると、貝塚の一帯は、南から北へゆるく傾斜しているものの、およそ平坦である。土器の散布は、南側の高い方が密である。貝塚の東側はこの平坦なところが80m前後にわたり、30mほどの幅で台地の先端まで続いている。ここは現在、山林であるが、台地の先端の下は、九十九里平野へ通じる谷である。貝塚の東南から南側にかけては、急な斜面で、谷に落ちている。谷は西から東へと下っていて、より深い九十九里平野への谷に合流する。貝塚の下で標高24~20m、幅50m前後である。この谷の斜面は現在、山林であるが、上述のようにこの谷に面した台地のへりにA貝塚とア貝塚の間の貝散布地があるだけである。貝塚の西側は、平坦な台地が続く。現在は山林である。貝塚の北側は、谷があって一段低くなったあと、その北側はまた高くなって、平坦な台地になっている。この北側の台地は貝塚に立って見ると貝塚より高く感じるが、実際の標高は貝塚の南側とおなじ40~41mである。貝塚の北側が低いための錯覚である。この台地にも、土器は散布するが、まばらである。貝塚北側の谷は、B貝塚の北にのびる道路が分水嶺となって東西に分かれ、北西と東に向って下っている。北西に下る谷はA貝塚・B貝塚の西側から始まり、その中にW貝塚・X貝塚・Z地点・イ貝塚がある。イ貝塚が慶応義塾大学の調査の時には土中に隠れていて確認できていないように、今回の調査で2 Tの北端で地中深くに貝の集中がみつかったように、谷の中には地表からではわからない地点貝塚が埋まっていると思われる。貝塚のみならず、谷の中には、土器・獣骨が多いことは慶応義塾大学の調査で明かにされているところである。谷の中は2 Tから70m強北西へ下ったあたりにある段から上流側では土器が豊富に散布する。なお、この谷は、貝塚の東側にある九十九里平野への谷にはすぐに合流せず、

北へ延々下ってようやくその上流の谷に合わさる。東に下る谷に面してB貝塚・C貝塚がつくられている。この谷も分水嶺の道路から30m強下ったところにある段から上流側では土器が豊富に散布する。山武姥山貝塚を構成する地点貝塚群と貝塚を取り巻く谷の関係をみると、貝塚の北側の比較的浅い谷のへりから中にかけて大きな地点貝塚があるとともに、地点貝塚が重なってあるのに対して、東から南にかけての深い谷では、ごく小さな地点貝塚しかないという対照的な様子である。

貝塚と谷との関係で注意しておかなければいけないのは、貝塚の北側の谷が縄文時代人によ



第2図 周辺地形図 (1/5000)

って貝塚をつくるだけでなく埋められていったということである。谷の中の土に大量の土器や獣骨、さらにロームが混ざるのはそのためと考えられる。この埋めたての結果、北側の谷は浅くなる反面、貝塚一帯の台地は低くなった可能性が考えられる。北側の谷の中の段は、後に畑を段々状につくるために設けられた可能性があるが、縄文時代につくられていたものかもしれない。

地点貝塚の環の内側の地形は、北から南にゆるく傾斜するものの、ほぼ平坦にみえる。しかし、地表下の地形は複雑である。まず、貝塚の東側には、浅い谷が、北東に下るものと南西に下るものとある。また、貝塚の北側では、C貝塚の南側で、表土下にすぐ赤味を帯びた褐色の粘土層が出て来て、ローム層が無い。貝塚の南側にはローム層があるので、本来あったローム層がなくなったのが、貝塚の南側に比べて北側が2m前後低い理由かもしれない。北側の谷の中の段といい、山武姥山貝塚の現在の地形のできあがった過程は、複雑と思われる、今後、調査が行われる際にはその解明が期待される。

2. 調査の方法と経過

山武姥山貝塚の発掘調査は、今回の確認調査に先立って、過去に慶応義塾大学によって5回にわたって行われている。第1回はA貝塚・C貝塚・Z貝塚（地点）を発掘し（清水 昭和36年）、第2回はC貝塚とZ地点を発掘し（清水 昭和39年）、第3回から第5回はZ地点に集中して発掘している（清水 昭和40年、鈴木 昭和43年、藤村 昭和47年）。A貝塚とC貝塚はその一部を発掘したにとどまるが、Z地点は縦横にトレンチを入れるなどしてかなりの部分が発掘している。周知のようにこれらの調査の正式報告書は未刊であり、以上掲げた『日本考古学年報』での簡単な報告が発表されている他、別のところに主題がある論文中に概略が説明されているにとどまる（清水 昭和33年・昭和50年、鈴木 昭和38年）。5回の発掘のこうした報文の記述をまとめると、つぎのような事柄が指摘されている。

①発掘調査の結果、A貝塚は縄文時代中期の、C貝塚は中期～後期の貝塚である。発掘調査はしていないがB貝塚は後期から晩期前半の貝塚であろう。

②Z地点は、貝塚とは言いがたく、包蔵地であるが、晩期の土器が大量に棄てられている。焼土層がある他、石器や獣骨なども多い。

なお、鈴木公雄氏の教示で慶応義塾大学所蔵の山武姥山貝塚の発掘関係資料を調べたところでは、第1回の調査時と第5回の調査後に、貝塚の地形図が作られている。第1回の調査時作成のものは未発表であるが、第5回の調査後作成のものは、『横芝町史』特別寄稿篇に縮小して掲載されている（清水 昭和50年・第二図）。

今回の確認調査では、慶応義塾大学の調査の及んでいないところの調査を行おうという意図のもとに、4つのトレンチを設定して、貝層、遺構の確認をねらうとともに、新たに公共座標

にのった貝塚の地形図の作成を行った。現地調査は、平成元年9月18日から10月17日の1箇月間でおこなった。人力をもって表土除去から埋め戻しまで行った。

1 T (Tはトレンチの略、以下同じ)は、Z地点の南側にあたる一段高くなったところに設定し、縄文晩期姥山式提唱のもとになった土器の出土した有名なZ地点の縄文時代晩期の土器包含層の南側への広がりを探った。2 Tと3 Tは、A貝塚・C貝塚とならんで大きな貝塚でありながら、これまで全く発掘調査されていないB貝塚の西側と北側に設定し、B貝塚の広がりを探った。4 Tは、環状にめぐる地点貝塚群の内側に設定し、地点貝塚の環の中の遺構の有無を探った。各トレンチは、2 m×2 mの大きさを原則とする区画で細分した(第3～6図参照)。

遺構は、1 Tで住居跡を2つ、3 Tで土坑を1つ、4 Tで柱穴列を1つ確認したが、1 Tの住居跡は、区別が要るので、1 T-Aと1 T-Bと名付けた。遺物は、1 Tでは、1 T・1 T-A・1 T-Bで、ポイントとレベルを取って上げたものがあり、そのうち1 Tで上げた中に、1 T-A・1 T-Bに本来入るものがある。これは、住居跡とはっきりするまで1 Tで上げたためである。1 T-A・1 T-Bの覆土中一括で上げたものは、それぞれ0番である。1 Tを10個の小区画に分けて層每一括で上げたものは、1 T 1～10そして1ソ (ソは層の意)、2ソ、3ソと記す。2ソの後に1からつく数字は、上げた日の前後を表す。およそ大きい数の方が下から出土したといえる。遺物の注記の意味内容は、2 T・3 T・4 Tも同様である。遺物取り上げの際の層の区別は小区画毎に地表から1枚目を1層、2枚目を2層としている。したがって、同じトレンチ内の遺物でも場所によって同じ2ソと注記されていても大きく異なる性質の層からそれぞれ出土していることがある。しかし、各トレンチとも土層断面図の層名は、遺物上げの時に2層・3層としたものをそのままのこし、その中の差異をA・B・C・・・で表現した。

地形図の作成は、測量業者に委託して行ったが、貝塚の位置、範囲は、発掘調査と平行したボーリング調査の結果をもとに指示した。地表から数十cmで貝の当たりがかなり感じられるところをもって貝塚とした。各地点貝塚の名称は、慶応義塾大学の命名によったが、B貝塚とW貝塚はひと続きと思われ、Y貝塚は南側に流れた残骸を記録した。W貝塚の位置は、上述の慶応義塾大学の第1回の調査時の未公表の地形図による。公表されている『横芝町史』特別寄稿篇の地形図のW貝塚の位置は、これより畑1枚南にずれている。A貝塚とI貝塚は、慶応義塾大学の調査では未発見の貝塚で、今回新たに命名した。A貝塚はゴボウ栽培の深耕による発見である。I貝塚は表土の流出による露出であろうか。この他に地形図に3箇所、貝散布と記すところは、地点貝塚ではないが、地表面に貝がまばらながら見られたところである。こうして作成した地形図の原図の縮尺は1/500であるが、本書には1/1000に縮めたものを掲載する。

地形図中に1 Tから4 Tの位置を入れてあるが、各トレンチの基準杭の公共座標値は以下の通りである。単位はmである。

	X	Y		X	Y
1 T N	-36931.269	55554.613	3 T E	-36878.231	55617.138
1 T S	-36943.168	55543.923	3 T W	-36874.556	55607.860
2 T N 1	-36866.336	55600.713	4 T E	-36965.644	55629.684
2 T N 2	-36879.508	55593.529	4 T S	-36962.861	55611.844
2 T S 1	-36882.138	55592.094	4 T W	-36945.203	55612.829
2 T S 2	-36886.529	55589.695	4 T N	-36947.599	55630.353
			4 T C	-36955.229	55621.094

3. 各トレンチの状況

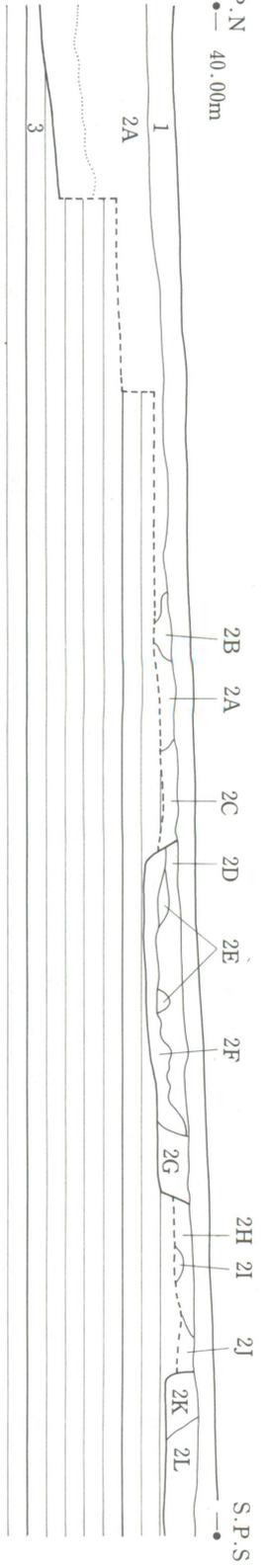
1 T (第3図、図版2～4)

Z地点の南側の畑に南北方向に設定した。当初の2m×16m、後の北側の2m×4mの拡張の計40m²を発掘した。表面から20cm～30cmが耕作土(1層)で、高い南側が薄く、低い北側が厚い。その下は縄文晩期前葉の土器の良好な包含層(2層)である。ロームの混入が目立つ。2層の上部は耕作で削られ、1層との境ははっきりとした線である。トレンチの南側で、2層を20cm前後掘り下げたところで、縄文晩期前葉と後葉の2つの住居跡を確認した。2つの住居跡は、検出時には住居跡であるか疑問があったので、トレンチにかかる部分を発掘した。住居跡の存在確認後は、2層のトレンチ全体にわたる掘り下げは止め、トレンチ北端の1T1の2m×2mだけ3層上面まで掘り下げた。2層の上面から1m前後で3層の黒褐色土層に達したが、地山のロームまでは、ボーリングしたところでは、3層の上面からさらに数十cm以上あるようである。3層の上面は南東側が高く、北西方向に傾斜する。2層の下部から3層にかけて、粉化していたが、大形の獣骨が目立った。トレンチ北側の1T9・10の拡張部分は、トレンチの南側で住居跡が見つかったことから、北側には無いのか探ろうとしたもので、2層上面で調査を終えたが、遺構はみつからなかった。遺物は、住居跡と2層から大形の破片を多数混じえた大量の土器が出土した。土器以外の遺物は、土器片利用円盤類が目立った。石器その他は多くない。なお、2層からは山武姥山貝塚での出土が報告されていない縄文前期の興津式と中期の五領が台式の土器が出土している。2Tでの黒浜式の出土とともに山武姥山貝塚の年代を考える上で注目される。

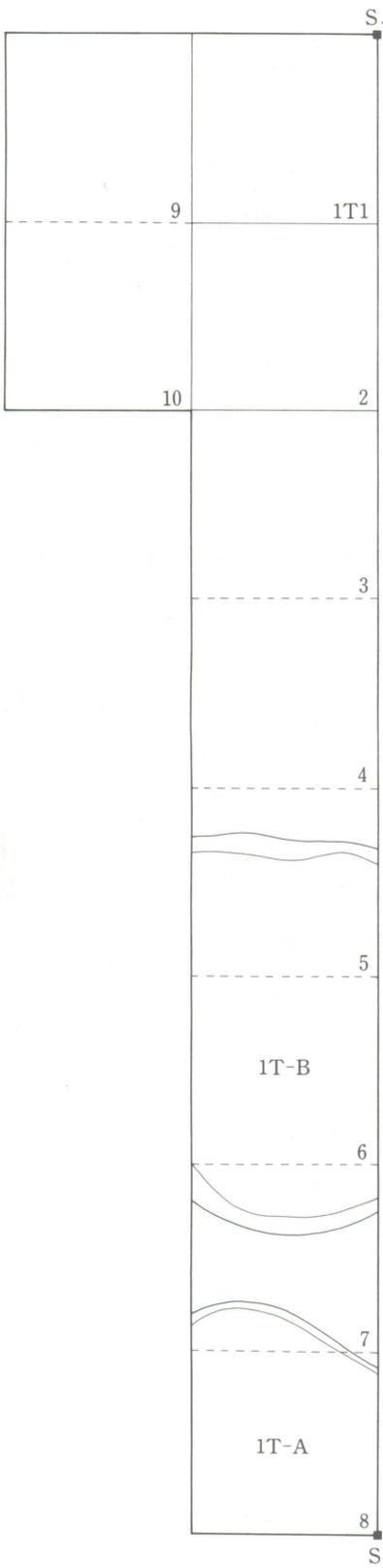
2 T (第4図、図版5)

B貝塚の西側の畑に南北方向に設定した。畑の傾斜とは直交する。2枚の畑にわたるが、それぞれの畑の所有者が異なるために、境界をいじらないようにということで、北部分の2m×15mと畑の境界を挟んで3m離して南部分の2m×5mに分けて、計40m²を発掘した。北部分では、表面から20cmが暗褐色の耕作土(1A層)で、南側では貝層が露出した。耕作土の下は、

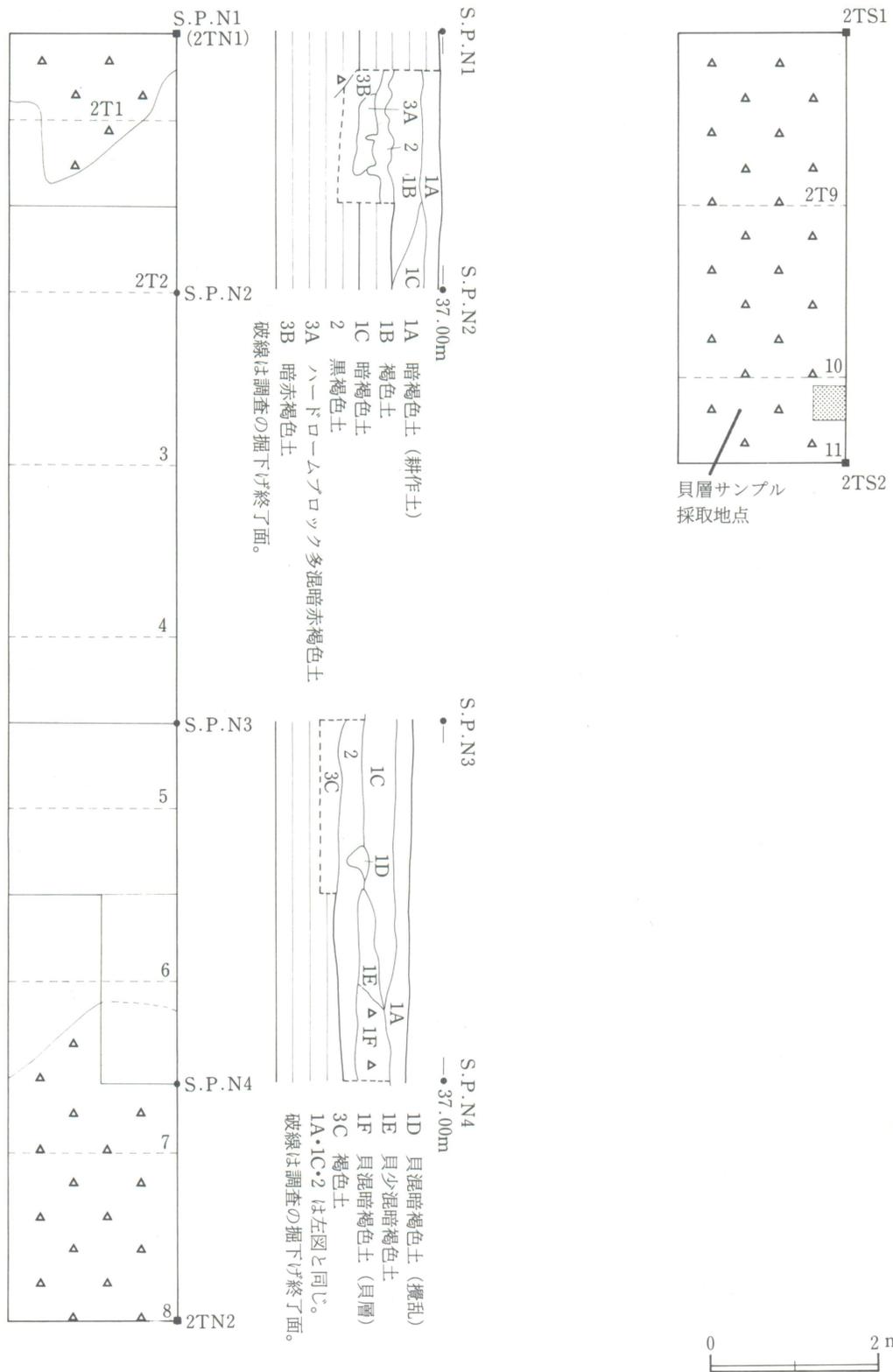
S.P.N
40.00m



- 1 ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土 (耕作土)
- 2A ハードローム小アロツクとハードローム粒と炭化粒混黄褐色土 (点線より下は骸骨が目立つ。ただし粉化)
- 2B 2Aの中でやや黒く、貝の混入する部分
- 2C ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土
- 2D ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土
- 2E 2Dの中で赤色焼土粒の混入が多くて赤い部分
- 2F ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土
- 2G ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土 (2Dよりやや黄色い)
- 2H ハードローム粒混黒色味を帯びた黄褐色土
- 2I 汚れたソフトロームと思われる暗黄色土
- 2J 暗褐色土混ハードロームアロツクの黄色土
- 2K ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土
- 2L ハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土
- 3 ハードローム小アロツクとハードローム粒と赤色焼土粒混暗褐色土 (上面で骸骨の混入が目立つ) 破線は調査の掘り下げ終了面



第3図 1T平面・土層断面図 (1/80)

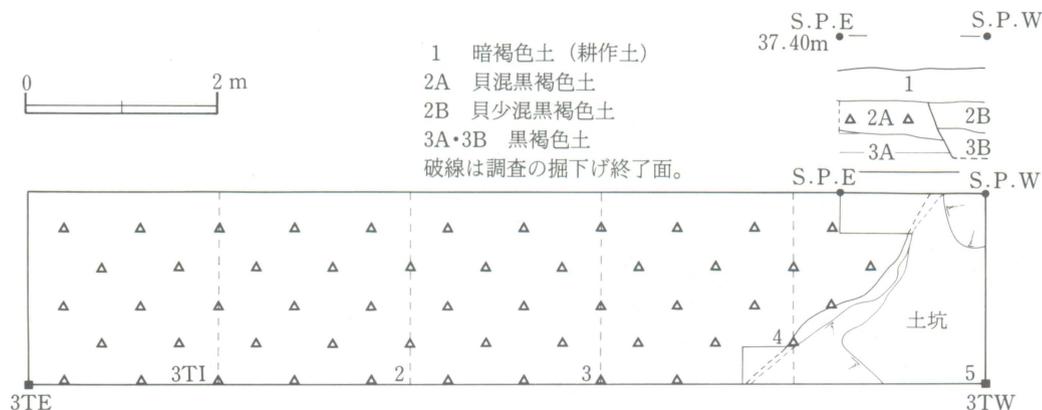


第4図 2T平面・土層断面図 (1/80)

貝層でない北側では耕作土と区別のつかない厚さ40cm前後の1C層があり、ついで黒褐色土層（2層）になる。ただし、北端はこうではなく耕作土の下には褐色土層（1B層）が30cm前後あって、黒褐色土層になる。北部分のトレンチ全体に、貝層の無い北側は黒褐色土層の上面まで掘り下げた。さらに、それぞれ2m×2mの大きさに、トレンチの北端と中ほどを掘り下げたところ、北端の掘下げ部分では、地表から1mほど下の3層（暗赤褐色土）中に、ハイガイ・ハマグリ・マガキを主体とする純貝に近い貝集中があらわれるとともに、慶応義塾大学の調査では確認されていなかった縄文前期前半の黒浜式土器が、中期～晩期の土器と一緒に、かなり出土した。トレンチ中ほどの掘下げ部分では、トレンチ南側でみつかった貝層がそこまで続かないとわかったところで、貝層の北端をわずかに掘り抜いて、貝層の乗る層を探り、貝層の年代を知ろうとした。貝層の下層は、前浦式、千網式の土器も混じる。したがって、B貝塚の一部である貝層の年代もその頃の可能性がある。

2Tの南部分には、地表面から貝が目立ち、貝塚が露出していると思われた。そこで、耕作で攪乱されている表面から30cm前後の土を取り除いて生きた貝層を露出させたところで、発掘をやめた。貝層は、表面清掃の際に土の混入は多いが獣骨が豊富なことが見て取れたため、サンプルを採取した。貝層のうちでも状況の良いと思われた地点を選び、縦横40cmの正方形で、貝層の傾斜に沿って厚さ5cmで1枚として、計4枚採取した。サンプルを採った跡の下側には貝層が続いていた。この貝層サンプルについては、第3節で詳しく触れる。

遺物は土器片が大量であったが、1Tに比べると小破片ばかりで、大形の破片はほとんどが2T1・2の3層出土のものである。石器他はわずかである。



第5図 3T平面・土層断面図 (1/80)

3 T (第5図、図版6)

B貝塚の北側の畑に東西方向に設定した。畑の傾斜に沿う。2 m×10mの20m²を発掘した。表面から20～30cmが耕作土(1層)で、小さい破片ばかりであるが、土器が目立つ。その下に、西端を除いて、B貝塚の一部である貝層が露出した。B貝塚の北側はこのトレンチあたりで終わるようである。西端だけ貝層が露出しないので、貝層が下へもぐっているか確認しようと掘り下げた。結局、そこは貝層を掘り込んだ土坑であった。その年代、性格は不明である。

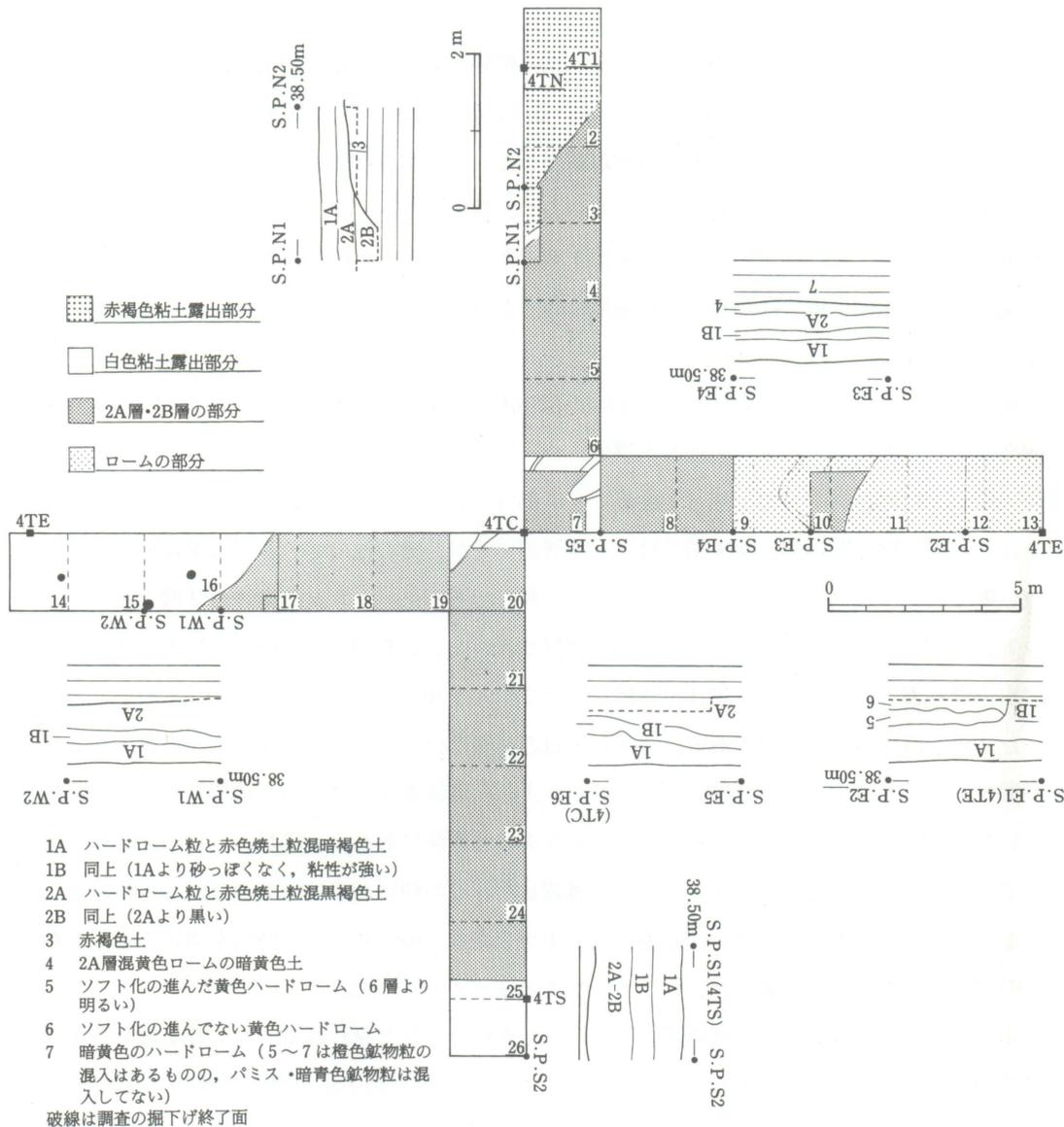
遺物は、土器は小破片ばかりで、石器他はわずかである。

4 T (第6図、図版7～9)

地点貝塚の環の中央に設定した。2 m×25mの鍵手形のトレンチ2本で十文字にして、計100 m²発掘した。表面から20cm～60cmが1層で、ロームと砂の混入が目立つ。下の方は砂の混入が若干減り、粘性が増すので上部(1A層)と下部(1B層)に分けられる。その下は、北東端では赤褐色の粘土層が出、南東端ではローム層が出るが、その他のところでは黒褐色の粘性の強い縄文後期・晩期の土器の混じった土層(2層)であった。トレンチ全体は2層上面まで掘り下げたが、2層は6個所に分けて一部だけ掘りぬいた。第6図には、掘りを終えた時点での露出土層を表す。4 T 7、4 T 16から17にかけて、4 T 20の2層部分は、白色粘土の中に溜まった2層を掘り残したものである。4 T 10・11の2層部分は、ローム層の凹みに溜まった2層を掘り残したものである。2層の下は、トレンチの南東端寄りではローム層である他、明褐色ないし白色の粘土層である。柱穴列は、トレンチの北西側にあたる4 T 14から16の、2層を掘り下げて白色粘土層を露出させたところで確認した。この他に遺構はなかった。

遺物は、土器は小破片が多く、石器他はわずかである。縄文時代とは時代を異にするが、後世の須恵器、陶器、瓦の破片が、他のトレンチと違って目立った。

4 Tでは、ローム層と粘土層を開析した浅い谷を確認したと思われる。この谷を埋めるように2層が堆積しているのであろう。この谷は、4 T 2・3の赤褐色粘土層と2層との境の方向、4 T 11のローム層と2層の境の方向からすると、東西方向に延びるようである。4 T付近の地表面が西から東へ傾斜しているので、この谷は西から東へ向かって下るとと思われる。この谷の西側の終わりは、4 Tの外になってしまい、つかめなかった。地山の土層の上下関係であるが、トレンチ北東側の赤褐色粘土層と白色粘土層は、前者が上である。トレンチ南東側のローム層と白色粘土層の上下関係は、掘って確認していないが、ローム層が上で白色粘土層が下と思われる。



第6図 4T平面 (1/200)・土層断面図 (1/100)図

III 遺 構

1 T

住居跡 (第3図、図版3・4)

1 Tでは貝層には当たらなかった。縄文時代晩期の住居跡を2つ確認した。南側から1 T-A、1 T-Bと名付けた。ともに縄文晩期前葉の土器包含層を掘り込んでいる。掘り込み面は現在の耕作土中ないしその上である。

1 T-Aは、トレンチの南端にその一部がかかったもので、トレンチの東側、南側、西側に続いている。プランは円形であろう。直径4 m前後か。確認した掘り込みの深さは40cm弱である。炉跡、柱穴はみつからなかった。床面と判断した面は土の色が覆土の黒褐色から暗褐色に変化したところで、堅さがあると感じられたところであるが、住居跡の南端の方では床面と判断した面よりも下でも黒褐色土であった。大形の土器片が多く出土しているが、完形に近く復元できたのは第9図27の壺形土器だけであった。出土土器は住居の廃棄後にその跡に棄てられたり、流れ込んだものと思われる。出土土器から住居の年代は安行3 b式(姥山II・III式)期であろう。土器の他に土器片利用円盤・土製耳飾片・石器が出土している。

1 T-Bは、1 T-Aの北側にあつて、その中央がかかったもので、トレンチの東側と西側に続いている。プランは円形である。直径4 m強である。確認した掘り込みの深さは40cm強である。炉跡、柱穴はみつからなかった。焼土塊が見られたが、その下側に焼けたところがみられなかったので、住居跡に棄てられたものと思われる。床面の判断については、南側では土の色が変わる2 H層の上面としたが、北側では土の色に変化が無く、堅さで判断した。この住居跡も大形の土器片が多く出土しているが、完形に近く復元できたものは無く。比較的復元できたのは第13図27の粗製深鉢と第14図36の広口壺くらいである。出土土器の由来は1 T-Aと同じと思われる。出土土器から千網式期ないし荒海式期のものであろう。土器の他に土器片利用円盤・土偶片・玉類・石器などが出土している。

2 T

貝 層 (第4図・折込付図、図版5)

南部分のトレンチでB貝塚の続きの貝層に当たった。ロームも含めた土の混入が多く、混貝土層に近いが、獣骨・魚骨が豊富である。トレンチの説明で述べたようにサンプルを採取し、分析した。土器も小片ながら多い。この貝層の確認で、B貝塚とW貝塚がひとつながりのものと考えられる。また、北部分のトレンチで、B貝塚の一部と思われる貝層の下に位置する土層で前浦式・千網式の土器が見つかったことから、B貝塚は縄文晩期後葉まで形成されていたと考えられる。北部分のトレンチの北端では、B貝塚よりも古い層中に貝集中を確認した。ハイ

ガイ・ハマグリ・マガキが主体で、骨もわずか混じる。貝の間には、あまり土が入っていない。掘った範囲が狭いので判断できないが、B貝塚とは異なる貝塚の可能性がある。ごく少量であるが一部を採取した。この貝集中のある層には黒浜式土器が混じるため縄文前期前半のものである可能性がある。ただし、同じ層には姥山II式の土器も混じる（第4節）。

貝層サンプル（第4図、図版5）

2 Tの南部分のトレンチの南端2 T11において、既述のように貝層サンプルを採取した。採取地点はB貝塚の一面であり、貝層の状態が、今回の確認調査で貝層の当たった2 T・3 Tの中で最も良好で内容豊富と思われた。遺構とは言えないが、ここで触れたい。

貝層サンプルは、長さ40cm×幅40cm×厚さ5cmの一定の大きさのものを、貝層の表面から下へ向って続けて4枚採っていった。厚さは、貝層の表面から5cm、10cmという具合にした。採取地点の四隅の高さを確認したところ、結果的に、貝層に対してほぼ水平にサンプルを採った格好になっていることがわかった。採る際に貝層の壁や底から顔を出した大形の獣骨は、サンプル4枚合わせて数本であるが、抜き取ることができたものは抜いてサンプルに入れた。1枚、1枚を区別するために上から1・2・3・4と付けた。貝層サンプル採取地点の土層は、表土（耕作土）が貝の混入の目立つ暗褐色土で、その下のサンプルを採取した攪乱されていない貝層になると黒褐色土に変わる。貝層の性質は、土が多く、純貝層ではなく、混貝土層である。サンプル採取地点では、貝層に、上下で層が大きく変化している様子はみられなかった。ハードローム粒の混入が上の方では下の方より目立ったという違いはみられた。4枚目のサンプルは貝層の途中である。

残念ながら、サンプルの内容が大変豊富なため、水洗作業と骨の選別作業までで本格的な分析作業を行うところまで至らなかった。本書では、水洗作業と骨の選別作業の過程で得られたサンプルの内容についての簡単な知見を記すにとどまる。

貝は、チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴが目立つ。陸産の微小巻貝もある。

獣骨は、かなり多く、焼けたものもある。イノシシがみられる。

魚骨は、微小な脊椎骨が大量にある。魚骨については小宮孟氏の教示を得たが、それによると、ざっと見たところで以下の骨がみられる。

軟骨魚綱 Chondrichthyes

種不明

硬骨魚綱 Osteichthyes

真骨類 Teleostei

マイワシ *Sardinops melanostictus*

カタクチイワシ *Engraulis japonicus*

ウナギ *Anguilla japonica*

フナ属	<i>Carassius auratus</i> cf. <i>langsdonfii</i>
ギバチ	<i>Pseudobagrus aurantiacus</i>
スズキ属	<i>Lateolabrax</i> sp.
マアジ属	cf. <i>Trachurus japonicus</i>
ハゼ科種不明	Gobiidae gen. & sp. indet.

このうちウナギとフナ属の骨が多いようである。本格的な分析が進めば、魚骨の種類は、さらに増えるであろう、とのことである。

以上の自然遺物の他に、貝層サンプル中には土器片が混入していたが、小破片ばかりで、代表的な2片を第4節の第25図に掲げた。貝層サンプル中には、土器の他には、骨角器、貝製品といった人工遺物はみられなかった。

3 T

貝層 (第5図・折込付図)

土坑のみつかった西端を除いてB貝塚の続きの貝層に当たった。B貝塚の北のへりとその流れである。

土坑 (第5図、図版6)

トレンチの西端に一部がかかったもので、B貝塚の流れの貝層を掘り込む。底面に堅いところとそうでないところが見られた。出土した土器片は少なくないが、小さいものばかりである。土器片が小さいものばかりなので、住居跡ではないと思われる。性格は不明である。おそらくは縄文晩期のものであろう。なお、土坑の北東と南西に、トレンチの壁に沿って、貝層との関係を見ようとサブトレンチを入れている。

4 T

4 Tでは、貝層に当たらなかった。また、縄文時代の遺構にも当たらなかった。

柱穴列 (第6図、図版9)

トレンチの北西側で見つかったもので、4 T16の壁際と真ん中であって、白色粘土層中に掘り込んでいる。共に直径20cm前後で黒褐色の粘質土が詰まり、東側の柱穴には直径10cm前後の炭化柱がのこる。2つの柱穴だけであり、性格は不明であるが、「まとめ」の最後で触れるように付近に古く寺があったとの言い伝えがあるので、その一部かもしれない。4 T14の穴は柱穴より小さいので無関係であろう。トレンチからは須恵器、陶器、瓦の破片が出土している。柱穴と4 T14の小穴は全て発掘しなかった。1列の穴では柵列の可能性もある。柱穴列としたのは、トレンチ内から瓦片が出土しているので、建物跡の可能性の方が高かろうと判断したことによる。

IV 出土遺物

今回の確認調査では、1 Tを中心に大量の縄文晩期の土器資料を得ることができた。安行3 a式～千網式のもので、荒海式は僅かである。この他に後期の堀ノ内式・加曾利B式・安行1式・安行2式さらに中期の五領ガ台式・阿玉台式・加曾利E式、前期の黒浜式・興津式が見られる。紙幅の制約を考え、土器の紹介は、後期のうちの安行式と晩期に重点を置いて、前期・中期・安行式以前の後期は簡単に触れるにとどめる。また、底部は触れない。土器以外の遺物としては、土器片利用円盤が目立つ。円形に形を作っているものの、縁を磨っていないものがほとんどで、円盤かただの破片か迷うものが少なくない。完形のものも全点紹介できないので、掲載した分で出土したもののバリエーションがつかめるようにした。円盤以外の土製品は全て紹介する。石器は多くないが、完形品を中心に一部を紹介する。ここで触れるにとどめるが、軽石、自然礫、剥片・碎片（黒曜石、メノウ、チャート、頁岩など）も出土している。玉製品と骨角器は全て紹介する。貝製品は出土しなかった。遺構、トレンチの順で1 T-A、1 T-Bの順で遺構の遺物に先に触れた後、1 Tから順に各トレンチの包含層の遺物を紹介していくことにする。

玉類の材質は全て筆者が判断した。石器の材質は、1 T-A・1 T-B・1 Tの石器については柴田徹氏の教示を得た。3 T・4 Tの石器についてはそれを参考に筆者が判断した。

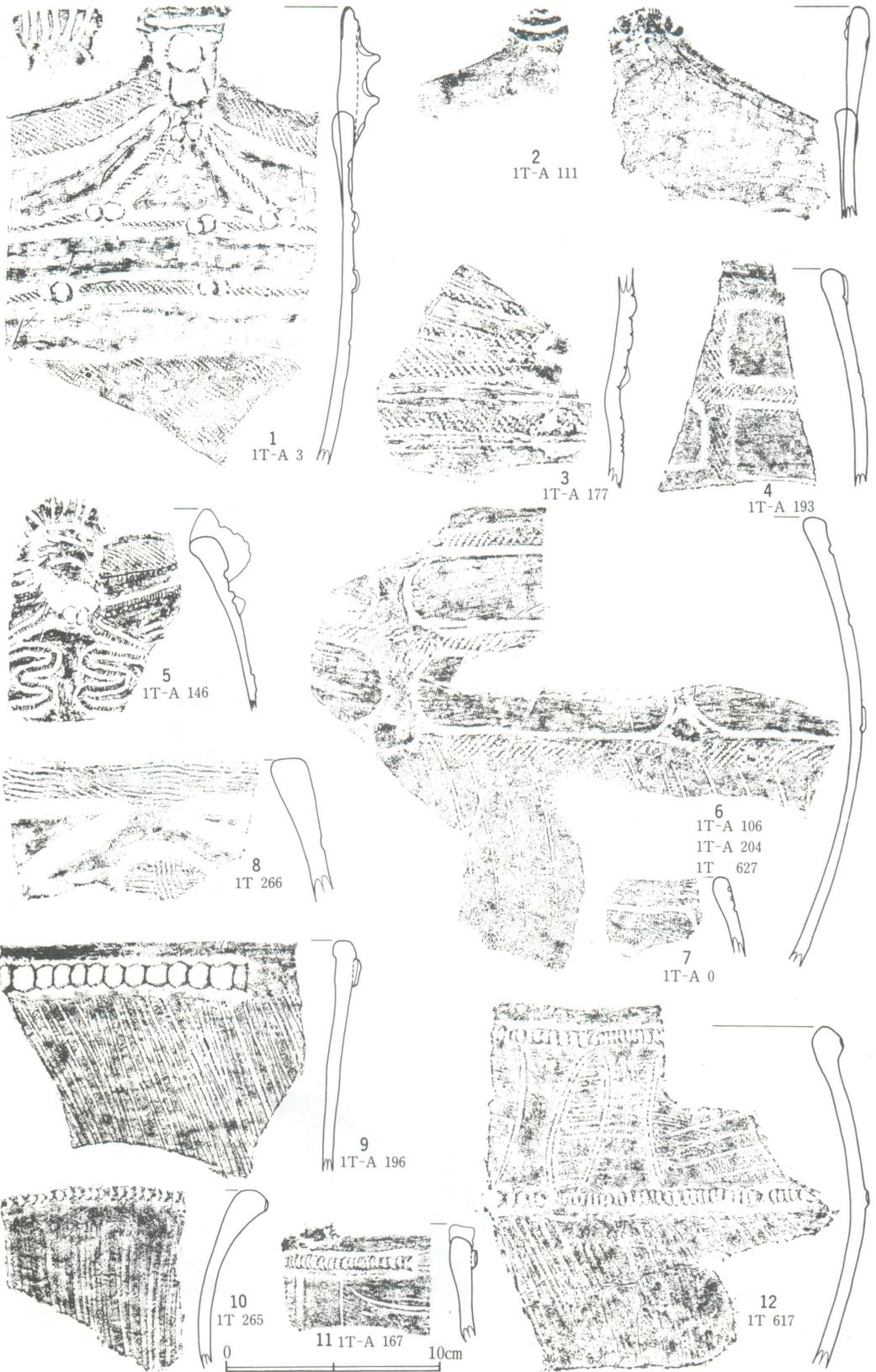
なお、図版の遺物番号は、挿図の遺物番号を記しているので了解頂きたい。

1 T-A

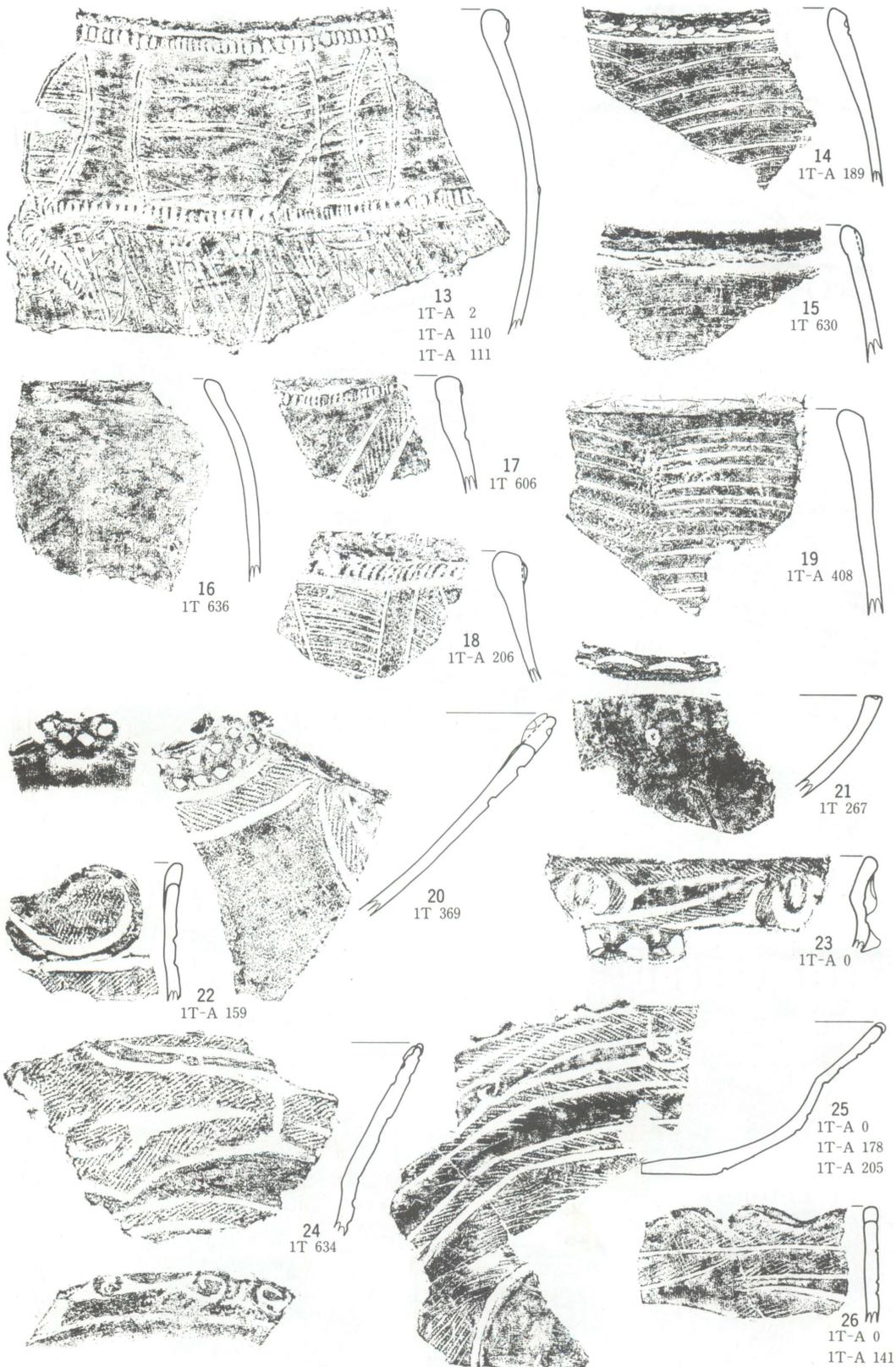
1 T-Aの遺物には、1 T-Aとして取り上げたものの他、1 T-Aで取り上げる以前1 Tで取り上げたもの、1 T-Aの所在した1 T 8のグリッドで取り上げたものを含める。

土 器 (第7～9図、図版10・11)

1 T-Aの年代は、出土土器から安行3 b式(姥山II・III式)期と思われる。後期を含む安行式を中心に紹介する。1 T-A・1 Tも同様であるが、深鉢形・浅鉢形・椀形・壺形の順で掲げ、その中で型式順に掲げる。1は安行3 a式の典型的な大波状口縁の精製深鉢である。波頂部の下の上下2つの瘤もブタ鼻状である。縄文帯に区画された無文部分はミガキである。内面もミガキがかかる。2は大波状口縁ながら無文の深鉢である。外面は丁寧にナデている。同様のつくりの平口縁の深鉢もある。波状口縁の頂上部は内面に2段に粘土紐を巻く。姥山II式であろう。3は大波状口縁の精製深鉢の胴部と思われる。施文が珍しい。一番下の縄文帯の下の沈線に小刻みな刺突がある。5は安行2式の平縁の精製深鉢、口縁の縄文帯の下とその下の縄文帯の下に刻みがつく。4・6は姥山II式の典型である、平縁で杵状文の精製深鉢。7は、杵状文であるが、口縁下に縄文ではなくて刺突が2列に走る。姥山III式になろう。8は前浦式

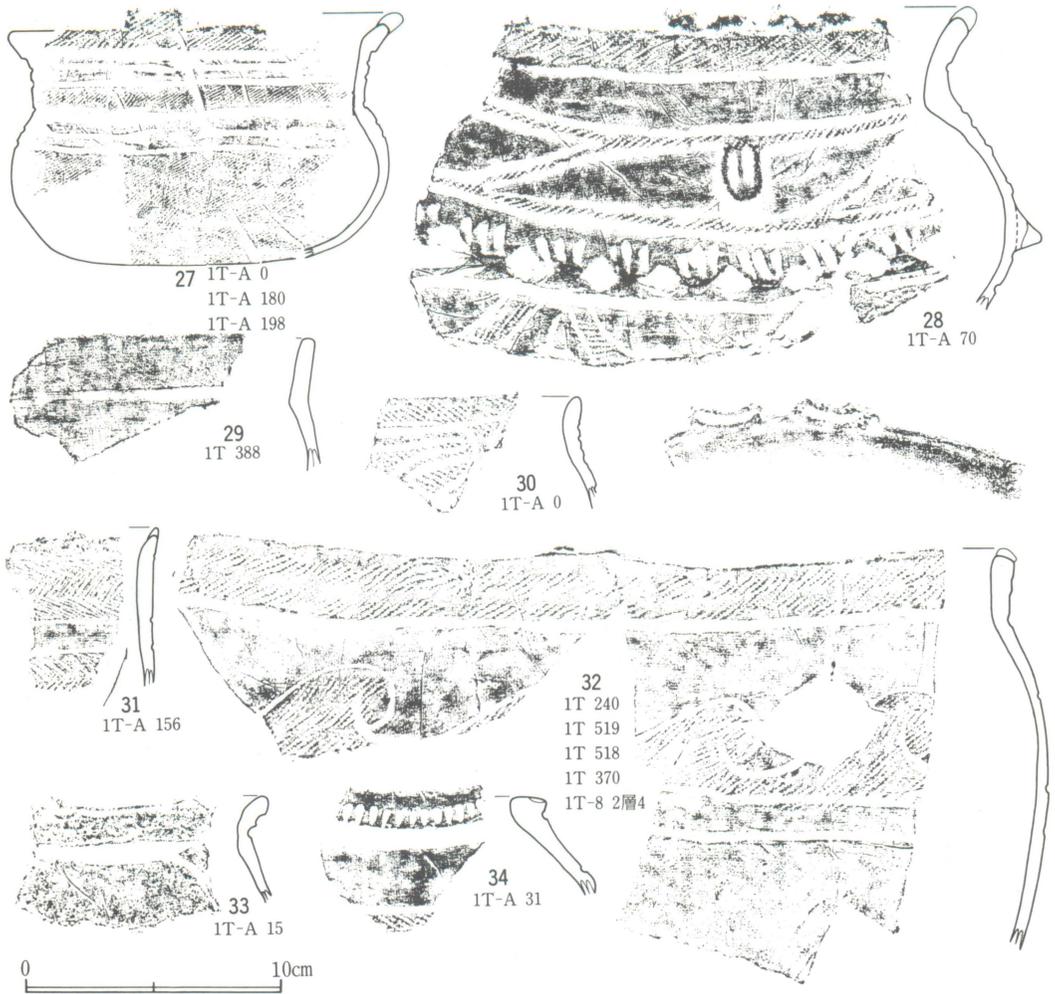


第7图 1T-A土器拓影图1 (1/3)



第8图 1T-A土器拓影图2 (1/3)

0 10cm



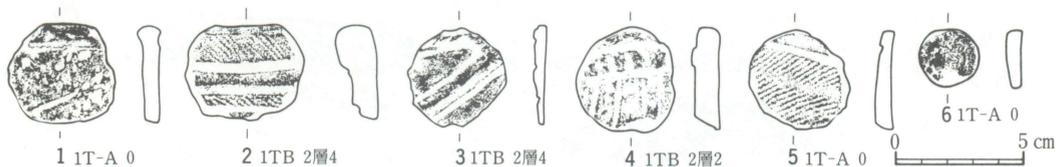
第9図 1T-A土器拓影図3 (1/3)

であるが、縄文でなくて撚糸文であり、千網式との関連が注目される。9は紐線文の下が条線であるが、安行1式であろう。10は安行1式の典型。11は安行3 a式であろう。口縁上に円柱形の飾りがつく。紐線文の下は垂直の沈線の右に弧状の沈線がある。12~14は安行2式の典型。15は紐線文が剥がれたのではない。口縁を厚く作っているので安行2式であろう。16は無文、安行2式であろう。17は斜行沈線の間に縄文、安行3 a式であろう。18は安行3 a式の典型。19は姥山II式の典型。スペースの具合で腕を先にしたが、20は姥山II式、波状口縁の頂を巻く粘土紐の内面に4つの刺突がある。21は無文で口縁に弧状の沈線が並ぶ。口縁の拓の中央の2つの弧は、内側に膨らむが、両端の欠けた弧は外側に膨らむ。安行3 a式か姥山II式あたりであろう。22・26は浅鉢であろう。細かい波状口縁からして姥山II式であろう。23は安行3 a式の浅鉢。24は前浦式の広口壺。口縁の内面に下の拓のような沈線での文様がある。磨耗している。25は安行3 a式であろう。縄文は付加縄文である。27は安行3 a式の壺。縄文帯に挟まれ

た2本の入組文帯はミガキである。上の入組文は、真ん中の沈線から上下の沈線に交互に枝を出すような形である。28は注口土器であろう。28の口縁の飾りの内面は下の拓。これも安行3 a式。29は32との口縁の形の類似から姥山II式であろう。32は姥山II式の典型。30は前浦式であろうか。31は姥山III式の壺であろう。33は杵状文と思われる。姥山II式。34は安行3 a式であろうか。

土器片利用円盤 (第10図)

掲載したのは6点であるが、第15図4の1 T-Bの方形のような類を含めて総数29点にのぼる。1は加曾利B式の深鉢口縁を利用、15.3 g。2は安行式の深鉢口縁、29.5 g。3は胴部、安行式であろうが、普通縄文帯であるところが無文帯、7.5 g。4は胴部、安行式の粗製深鉢のものらしいが、紐線文の下の条線間に浅い刺突がつく、19.4 g。5は胴部、安行式のものか、11.2 g。6は胴部、無文、4.0 g。



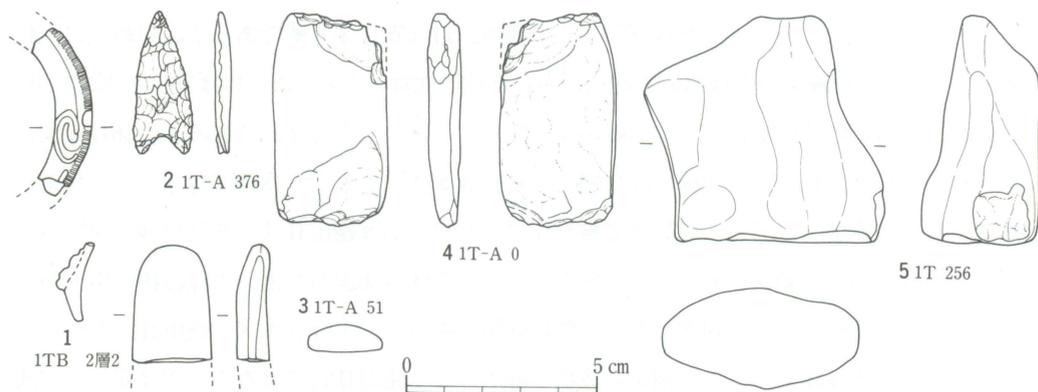
第10図 1 T-A土器片利用円盤実測図 (1/3)

土製品 (第11図1、図版15)

耳飾の破片である。表面は黒色で、丁寧にナデている。縁の刻みは細かくて浅い。入組文がつくことから、姥山II式に入ろう。

石器 (第11図2~5、図版15)

2は灰色に黒縞のチャート製、2.0 g。3は石棒片、光沢のある暗青色と褐色の縞の蛇紋岩製、両側面を磨っている。4は石斧、暗青色の粘板岩製、一部欠ける。5は砥石、淡黄褐色の砂岩



第11図 1 T-A土製品・石器実測図 (1/2)

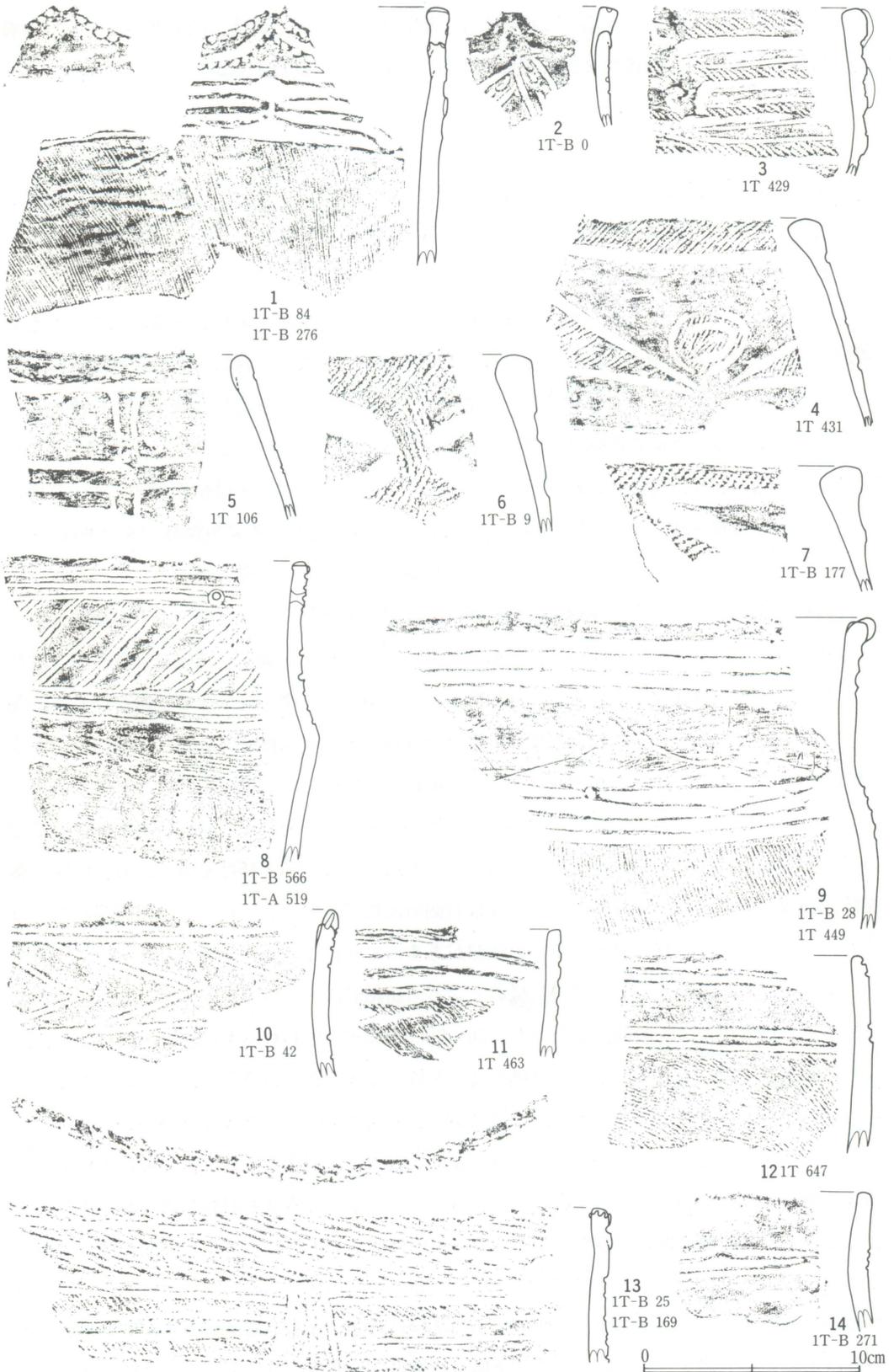
製、図の下側は平らに近いが磨った痕がなく、破片であろう。この他、凸基無莖でチャート質と凹基無莖で黒曜石の石鏃片2点、石棒片1点、敲石1点、軽石1点がある。

1 T-B

1 T-Bの遺物には、1 T-Bとして取り上げたものの他、1 T-Bで取り上げる以前に1 Tで取り上げたもの、1 T-Bの所在した1 T 6のグリッドで取り上げたものを含める。

土器 (第12~14図、図版11・12)

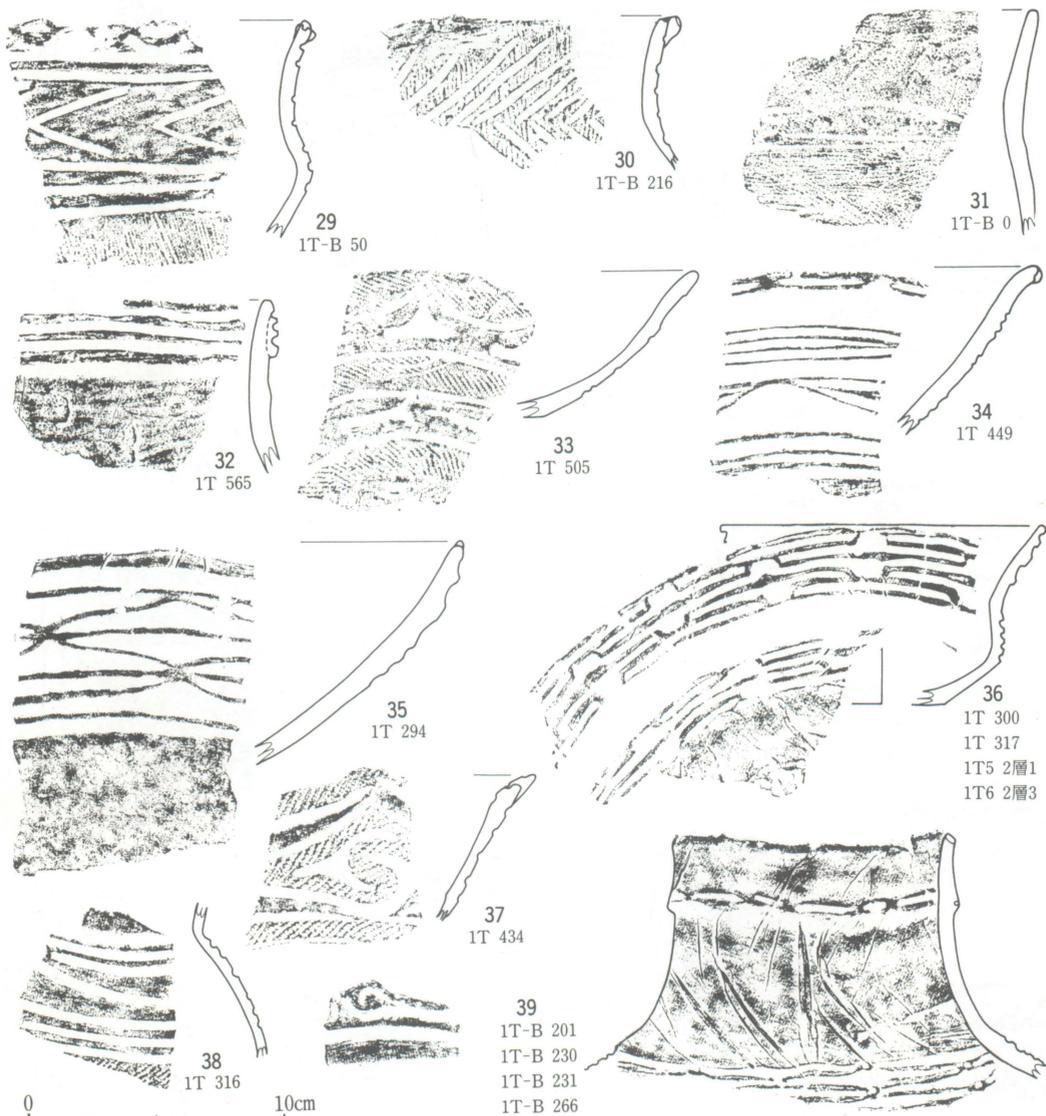
1 T-Bの年代は、出土土器から千網式期と思われる。安行式・前浦式・荒海式の土器もあるが、千網式の土器を中心に紹介する。1は安行式以来の大波状口縁の千網式の精製深鉢、口縁の内外面に斜め上からつけた刺突の列があり、この内外2列の刺突列に挟まれた口縁頂部に1条の沈線がある。外面の浮線は、条痕文をつけた後で削りのこす。2は安行3c式かと思われる波状口縁の破片、外面に口縁の粘土がかぶる。3は安行1式の平縁精製深鉢。4・5は姥山II式の平縁精製深鉢。6・7は前浦式。8~14は千網式と思われる精製深鉢。8は波状口縁、口縁の沈線にかかる丸い孔は焼成前に内外両方向からあけたもの、最大径のところから下は撚糸文。9は波状口縁、上下の浮線文の間の黒く打った部分は無文帯ではなく上下の浮線文と一体の文様帯と考えるべきか。10は波状口縁、逆くの字の沈線文が横走の沈線をはさんで2段につくと思われる。11は欠けているが波状口縁、右端が高まる。撚糸文の後で沈線をひくが、左下のところは逆の順である。12は平縁口縁、下の浮線文の下側は撚糸文。13は平縁口縁であるが、撚糸を押し付けたところが凹む。拓の左上、口縁の撚糸文帯を横走するのは沈線、誤ってひいたか。口縁下の厚みのある撚糸文帯の下の撚糸文帯よりやや凹んだ文様帯は沈線によるもので、条痕文ではない。14はゆるい波状口縁かとも思われる。15・16は荒海式の波状口縁精製深鉢。15は外面に赤彩の顔料がのこる。16は右側の波頂部が欠ける。17からは粗製深鉢で、17は安行2式であろう。18は垂直と斜行の沈線があるので安行3a式かと思われるが、口縁の内側に工具でつけた段がめぐる。拓の口縁のところの紡錘形のへこみはヘラナデの粘土の動きの痕である。19は撚糸文、前浦式あたりか。20~26は千網式と思われるもの。20・21は無文、21は内外面とも丁寧になデている。22は撚糸文に沈線。23は千網式の典型、口縁上から内面に朱彩、塗ったものか。地は淡黄褐色。24は撚糸文。25・26は条痕文。25は作りがよい加減で、口縁下の脹らみの表面とその下側はナデすらしなない。脹らみの下側には粘土紐の境目が見える。26は荒海式、波状口縁で2山と1山の頂がある。頸のあるところは壺形的であるが、壺とするよりは弥生土器の甕に近いとみた方がよからう。内外面とも丁寧にナデる。外面の最大径部から下側、内面の下の方にススの付着がみられる。28~32は浅鉢である。28は安行2式。29は斜めに外側に突き出した波状口縁、下側の2条の沈線の右端には瘤があったようにもみえる。下の方は条痕文、千網式。30も波状口縁、条痕文に沈線、千網式。31は条痕文、浅鉢ではなく27



第12图 1 T-B土器拓影图1 (1/3)



第13图 1T-B土器拓影图2 (1/3)

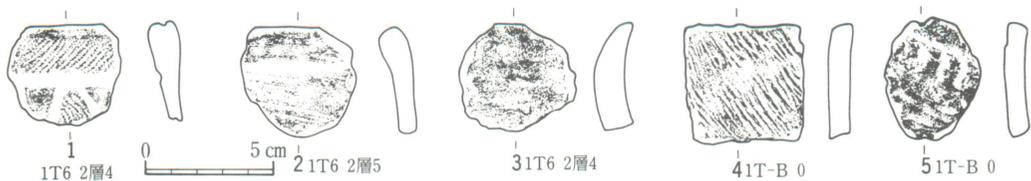


第14図 1 T-B土器拓影図3 (1/3)

のような器形かもしれない。32は千網式、壺に似るが、壺の口唇はもっと薄くなると思われる。33～35は椀。33は安行3 a式。拓の一番下の扇形の無文部は底部。34・35は千網式。34は外面に赤彩の顔料がのこる。35は波状口縁の波頂がわずか欠ける。断面は推定。36は千網式の広口壺、2段の浮線文のところは赤彩の顔料がのこるが、2段の浮線文の間の幅広の背景部分と下の浮線文より下側の部分にはのこらない。37は前浦式、内面に段があるので皿ではない。広口壺か。下に波頂部の内面の拓。38は荒海式と思われる壺、下の方は縄文。39は千網式の壺。口縁には富士山形の波頂が10個、等間隔につくと思われる。

土器片利用円盤類・土器片錘 (第15図)

円盤のうち掲載したのは4点であるが、総数10点で、うち4のような方形の類は4点である。



第15図 1 T-B土器片利用円盤類・土器片錘実測図 (1/3)

錘は今回の調査の出土遺物中でこれ1点である。1は安行式の深鉢口縁を利用したものと思われるが、口縁上の沈線、外面の紡錘車形の区画に縄文の2点は奇妙である。22.5g。2は安行式の粗製深鉢の口縁であるが、剥がれたのでなく、紐線文がない。24.1g。3は浅鉢の口縁、無文、25.2g。4は千網式の胴部と思われる。こういった正方形に近い土器破片も今回の調査で目についた。26.6g。5は錘、阿玉台式の胴部、爪形の刻みのつく隆帯がある。17.4g。

土製品 (第16図1・2)

1は土偶の足と思われる。表面は淡褐色でなめらかで、刺突の中には赤色顔料が残る。2は指で紐状にこねたものである。褐色で焼きは悪くない。

玉類 (第16図3・4、図版15)

3は白っぽい滑石製で、上下両面とも2箇所穿孔しかけた痕がある。10.3g。4は光沢のある青灰色の滑石製である。0.7g。

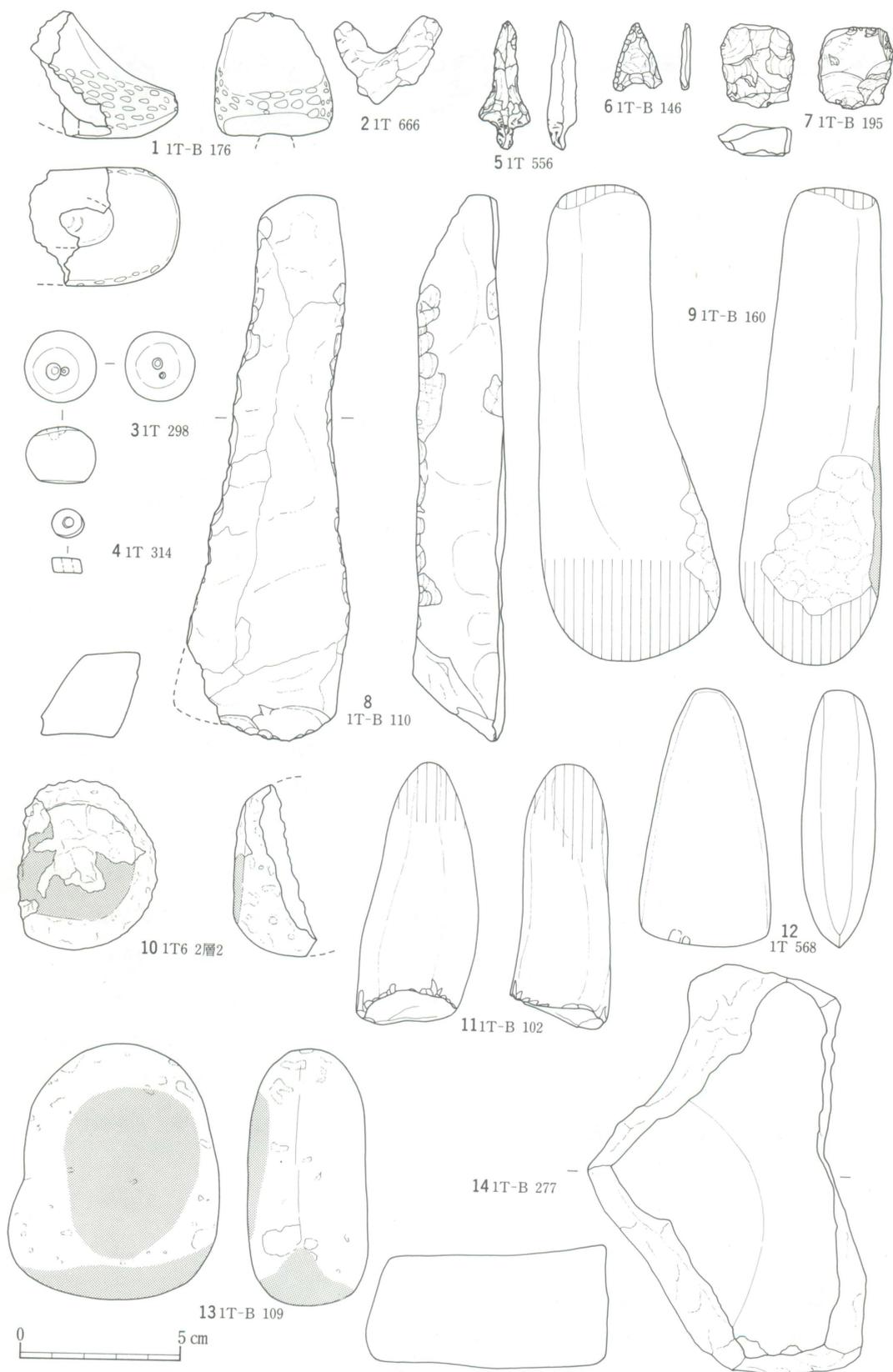
石器 (第16図5~14、図版15)

5は灰色の頁岩製、基部には、アスファルトかと思われる黒褐色の小さなシミがまとまってつく。3.0g。6は青灰色のチャート製、平面図の面の中央は割れる。0.7g。7は無色に黒縞の黒曜石製、片側の長辺に刃部を作る。5.9g。8は灰色の砂岩製、側面図で表した面だけが砥石の面のようにゆるやかな凹凸で、他の面は割れたままといった感じである。石器を作りかけて止めたものだろうか。260g。9は淡灰色の砂岩製の敲石で、図の縦線のところを敲いているが(以下同じ)、右下側面は敲打痕がひどい。400g。10は青灰色の安山岩製の磨石片、スクリーントーンのところで磨っている(以下同じ)。磨っている面の上の方は、凹む。11は光沢のある青灰色の安山岩製の敲石、図の下面は縁に剝離痕があるが、あまり敲打痕はない。12は青色の輝緑岩かと思われる石で作られている。112.6g。13は淡灰色の石英斑岩製、磨っているところは灰色味が強く、大変なめらかである。290g。14は灰色の砂岩製の石皿片。火を受けた痕がある。この他、敲石1点、敲石片2点、石皿片1点がある。

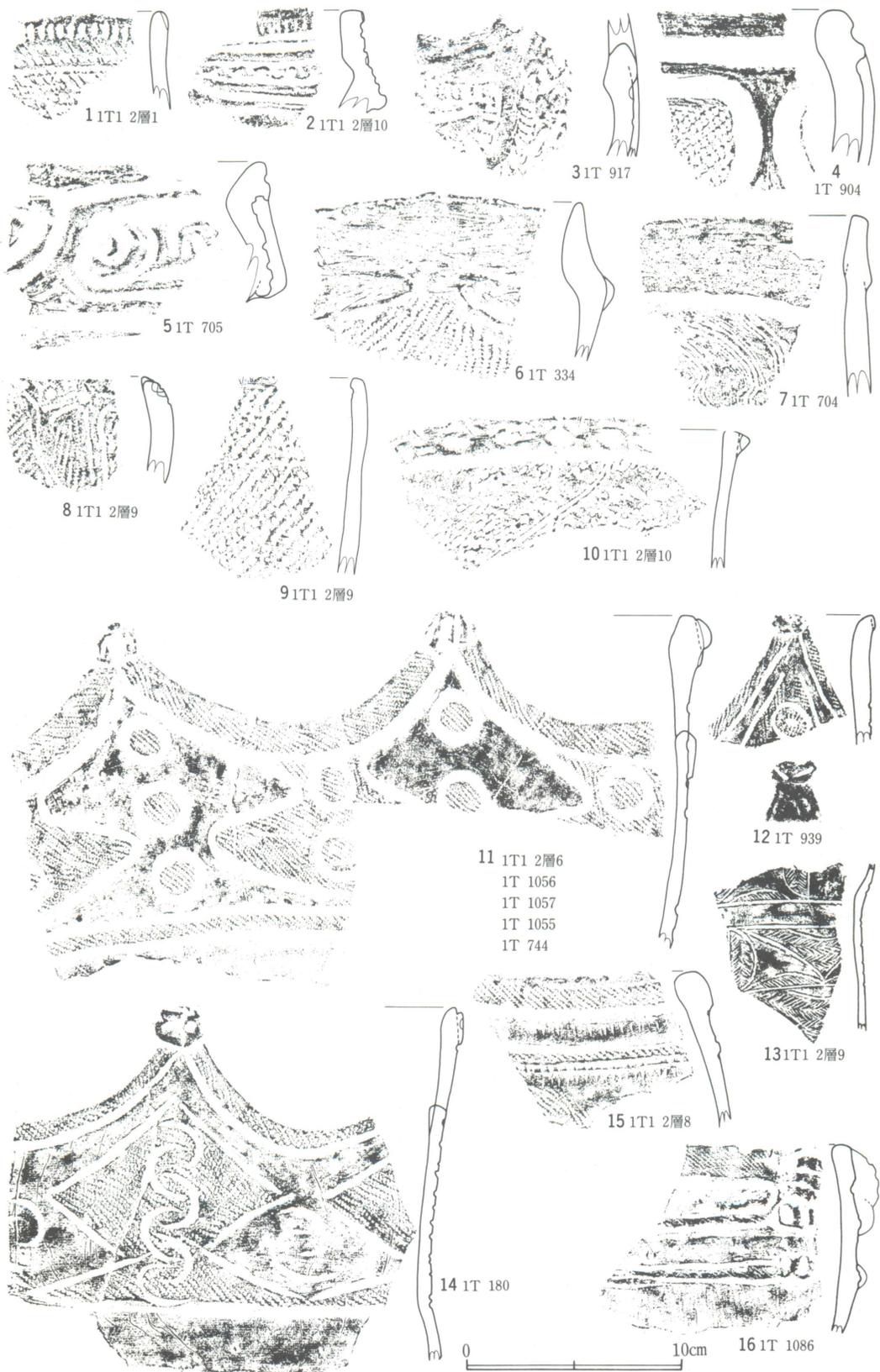
1 T

土器 (第17~21図、図版12~14)

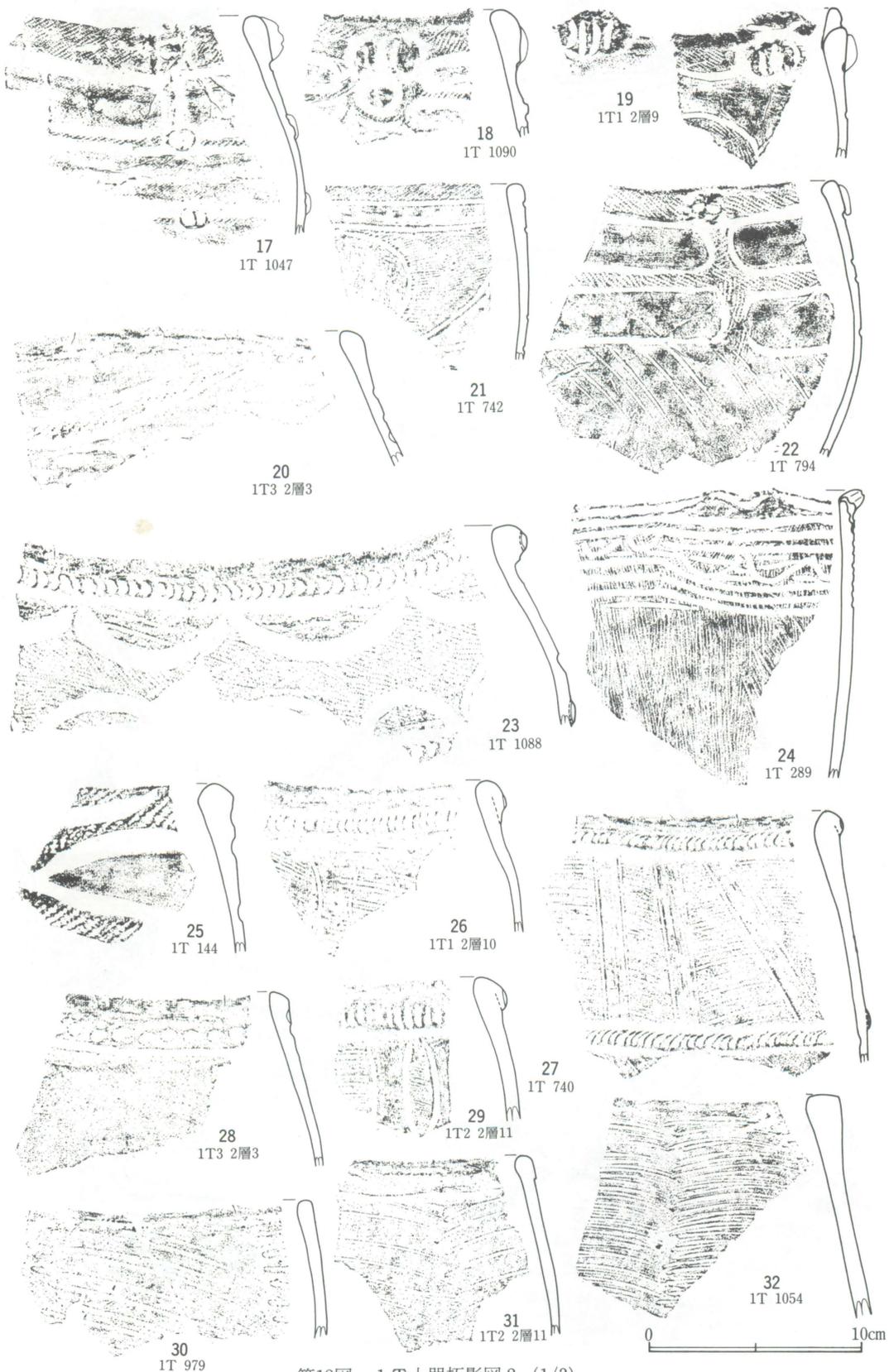
1は前期の興津式であろう。2は中期の五領ガ台式。3は同じく阿玉台式。4~6・8は同じく加曾利E式。7は後期の綱取式。9・10は後期の加曾利B式。11・12・14は姥山II式の大



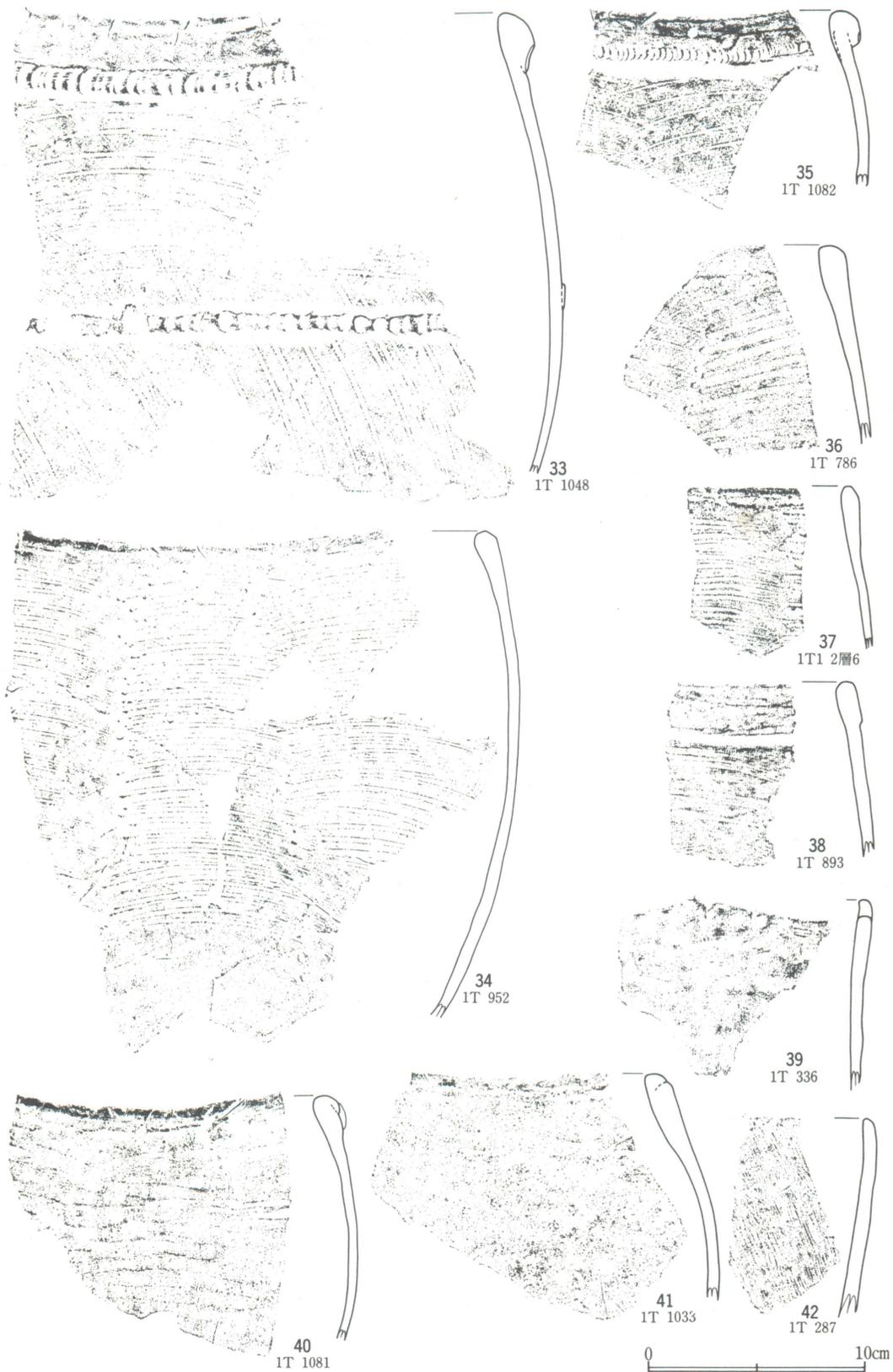
第16図 1T-B土製品・玉類・石器実測図 (1/2)



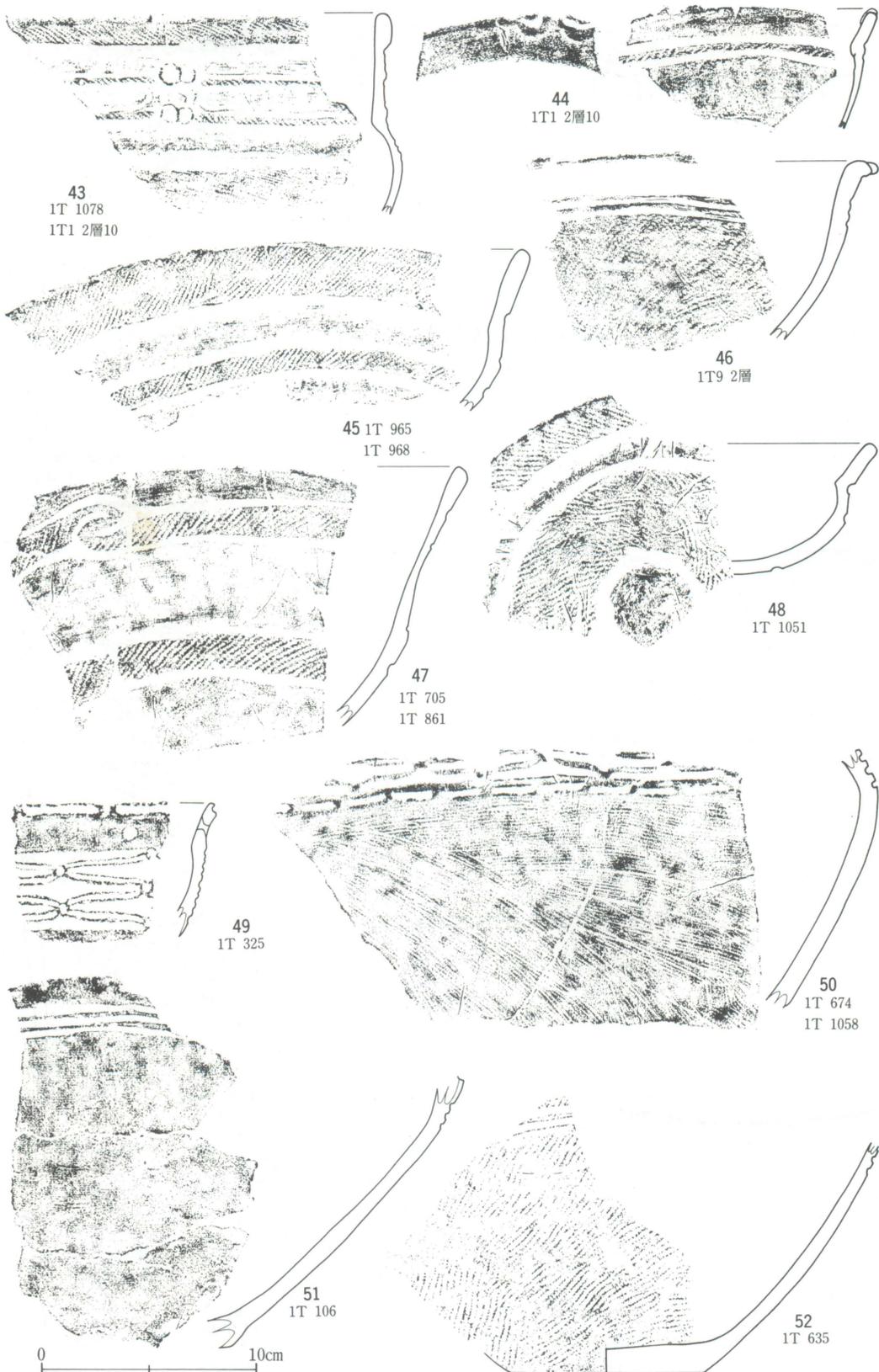
第17图 1T土器拓影图1 (1/3)



第18圖 1 T 土器拓影圖 2 (1/3)

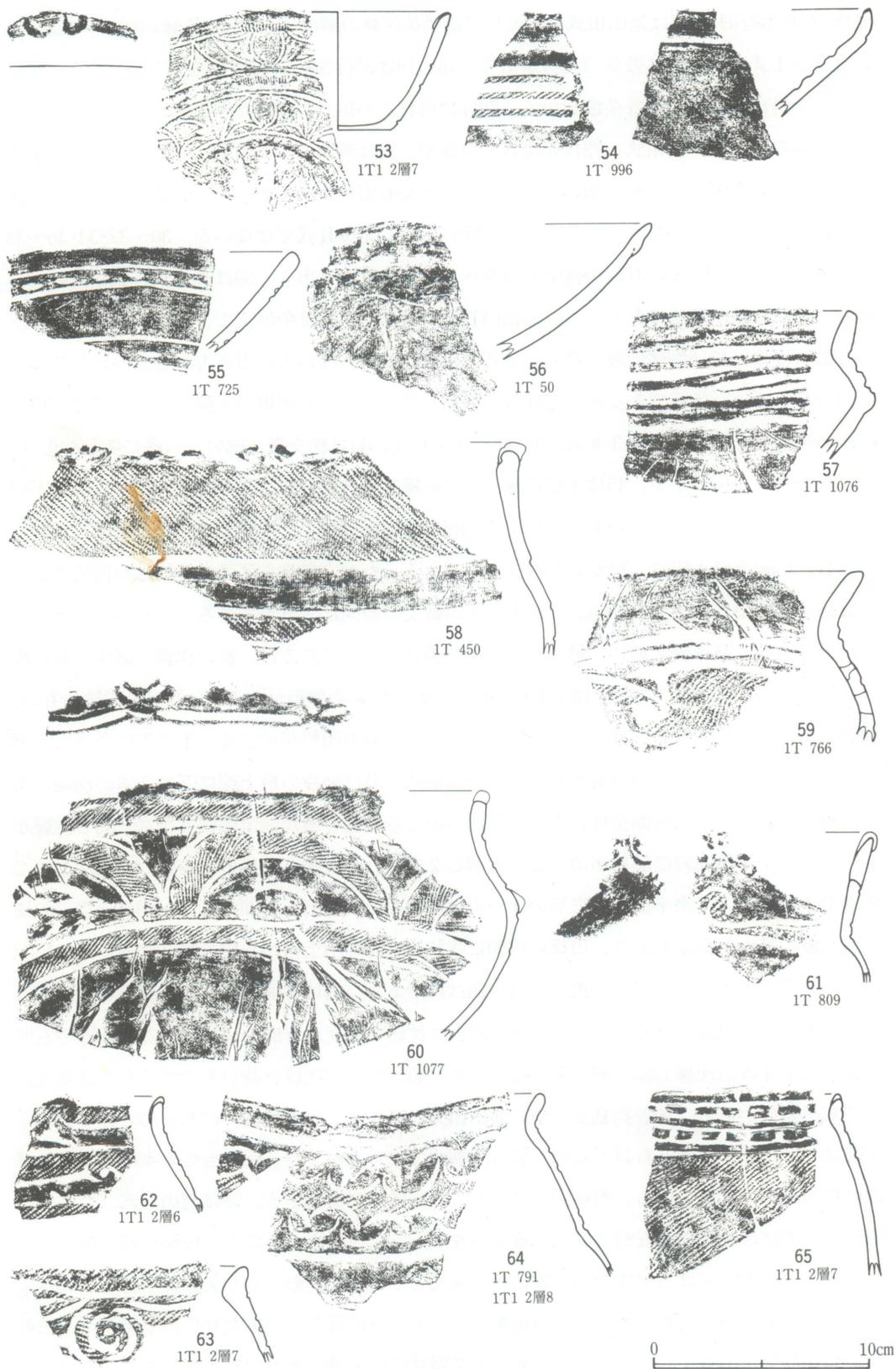


第19図 1 T土器拓影図3 (1/3)



第20図 1 T土器拓影図4 (1/3)

波状口縁精製深鉢。13は姥山Ⅲ式の大波状口縁精製深鉢の胴部。15～25は平縁口縁の精製深鉢。15は安行1式、下の方に弧状の沈線がある。16～19は安行3 a式。23も同じくであろう。縄文のない半月形のところには条痕がつく。20は姥山Ⅱ式かⅢ式、刺突は左下端に半欠があるので2列はある。21は姥山Ⅲ式。22は姥山Ⅱ式の典型。24は荒海式であろう。波状口縁。25は前浦式。26～42は粗製深鉢。26・29は安行2式。33・35も安行2式であろう。27は安行3 a式。28は外面はヘラケズリ、刺突がつくことと口縁の形から姥山Ⅱ式ではないか。30～32・34・36～38は姥山Ⅱ式のさまざま。31は口縁下の段をヘラケズリで作り出す。39は荒海式。40は丸い瘤のあることから姥山Ⅱ式であろう。41も姥山Ⅱ式であろう。42は条痕文で、荒海式ではないか。43～53は浅鉢。43は胴部の最大径のところの横走沈線が、浅い上に引き方も枝分かれているという具合でいい加減であるが、文様帯を区画している。この沈線の上側はヘラナデで下側は細かい条線文である。安行3 a式。44・45は姥山Ⅱ式。44は縄文帯が細い。口縁に突起があり、その内面を左の拓で示す。45は平縁口縁、上下の縄文帯の間の無文帯はミガキであるが、下の縄文帯の下側はナデとして両者を区別する。46は異質な資料で、大洞C2式に入るのではないか。47は口縁下の入組文の形から前浦式と思われる。ただ文様帯を区画する沈線が前浦式にしては細く、姥山Ⅱ式に近いのか。これも上下の縄文帯の間はミガキであるが、下の縄文帯の下はナデである。48は壺に近い。最大径部の無文帯はミガキであるが、底の沈線で区画された円形の部分はヘラケズリである。姥山Ⅱ式。49は外面に赤彩の顔料がのこる。孔は焼成後のもの。千網式。50～52は大形の浅鉢。50は浮線文の部分に赤彩の顔料がのこる。下の方の条痕文の部分にはほとんどススの付着がみられる。千網式。51は破片の最上部に下の3本の沈線と離れて横走沈線がある。外面全体に赤彩の顔料がのこる。52も破片最上部に下2本と同じ沈線があり、外面全体に赤彩の顔料がのこる。大洞C2式か。53は隅丸方形の底を持つ。破片なので断定できないが、本来平面隅丸方形の4つの隅の外面の口縁下、胴部中ほど、胴部と底部の境の稜に縦の細かい刻みがあり、口縁の内側に弧状の一对の粘土紐から成る飾りがあるらしい。内外面ともミガキである。姥山Ⅲ式。54～56は椀である。54は外面は無文で口縁下に段があるだけであるが、口縁には刻みがあり、胴部内面に沈線と縄文から成る文様がある。沈線の右側に縄文帯が4本の沈線の幅と同じ幅で続く。その幅の中ほど沈線の曲がりのすぐ右には焼成前の円形の刺突がある。加曾利B式。55は姥山Ⅲ式であろう。56は無文、口縁の形と作り方から千網式ではないか。57から以下は壺。57は千網式であろうが、内外面ともミガキであるのに浮線の作りはいい加減である。胴部最大径のところに隆帯が横走する。58は姥山Ⅱ式、口縁の内面の拓を下に示す。59は安行3 a式、破片の左端近くに三叉文とその下に円形の削り抜きがある。破片の左下端には三叉文の、右端には三叉文とその下に円形の切り欠きの一部がのこるようである。60は注口土器であろう。黒色磨研である。胴部最大径のあたりにある瘤のうち左のは上側に縄文があるが、右のはない。瘤の上に弧状の縄文帯があるので安行3 a式であろう。



第21圖 1 T土器拓影圖5 (1/3)

61は波状口縁、姥山II式。62は最下段の縄文帯の下に段がある。姥山III式。63は前浦式。64は破片の最下部にも横走沈線がある。弧状沈線の多用から安行3a式であろう。65は口縁に山形突起がある。口縁下の文様から大洞B-C式であろう。

土器片利用円盤 (第22図)

1は胴部で後期の土器と思われる。23.0g。2も胴部で安行2か3a式、欠けている図の右端に瘤がある。3も胴部で安行2か3a式、図の左端に瘤がある。16.3g。4も胴部で、外面は丁寧にナデている。時期不明。64.1g。5は破片で拓影のようにアンペラ底の底部の側面を磨っている。



第22図 1 T土器片利用円盤実測図 (1/3)

土製品 (第23図 1・2、図版15)

1は土偶の足、図示した面は黒く、反対面は淡褐色である。2はスタンプ形、下から上に突いて穿孔している。柄の穴の縁が盛り上がる。淡褐色で焼成時の黒斑がある。10.7g。

玉類 (第23図 3・4、図版15)

3は暗灰色の滑石製、一部欠ける。4は緑色のヒスイ製、3.3g。

石器 (第23図 5~13、図版15)

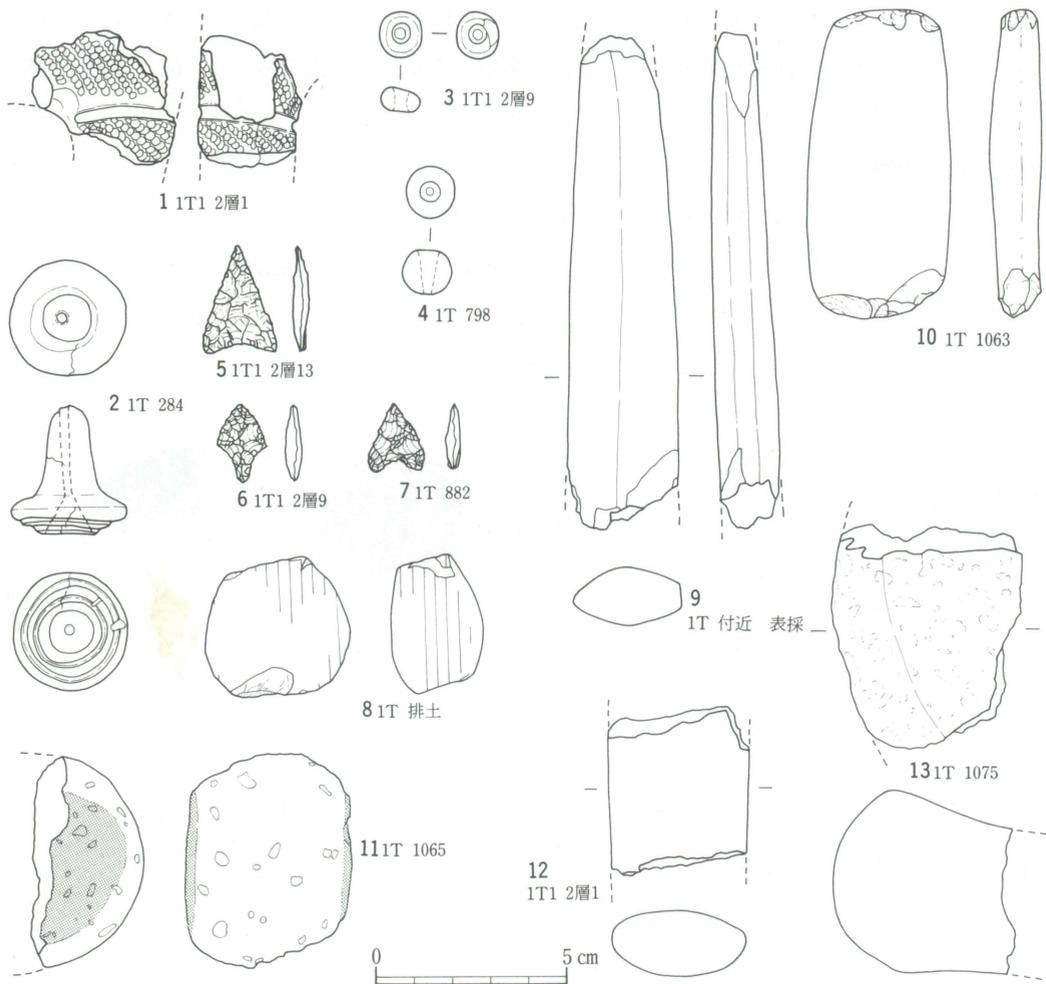
5は青灰色の安山岩製、1.5g。6は淡褐色の頁岩製、0.7g。7は無色に黒縞の黒曜石製、0.6g。8は淡黄色の石英製の敲石、図の上下の面は敲打痕がひどい。45.7g。9は光沢のある青灰色の石墨片岩製の石棒片、斜めの擦痕が多くつく。10は淡灰色の頁岩製、56.6g。11は灰色の安山岩製の磨石片。12は淡灰色の絹雲母片岩製の石棒片。13は灰色の安山岩製の石皿片、火を受けて平面図の上面は黒い。この他石斧片5点、石鏃片1点がある。

2 T

2 Tの遺物のうち番号をつけて取り上げたものは、2 T 1・2に設定した2m四方の掘り下げ部分の中の貝集中を伴った3 A・3 B層出土のものだけである。2 Tの他の地点、土層から出土した遺物は、出土層毎に一括で取り上げている。

土器 (第24図、図版14)

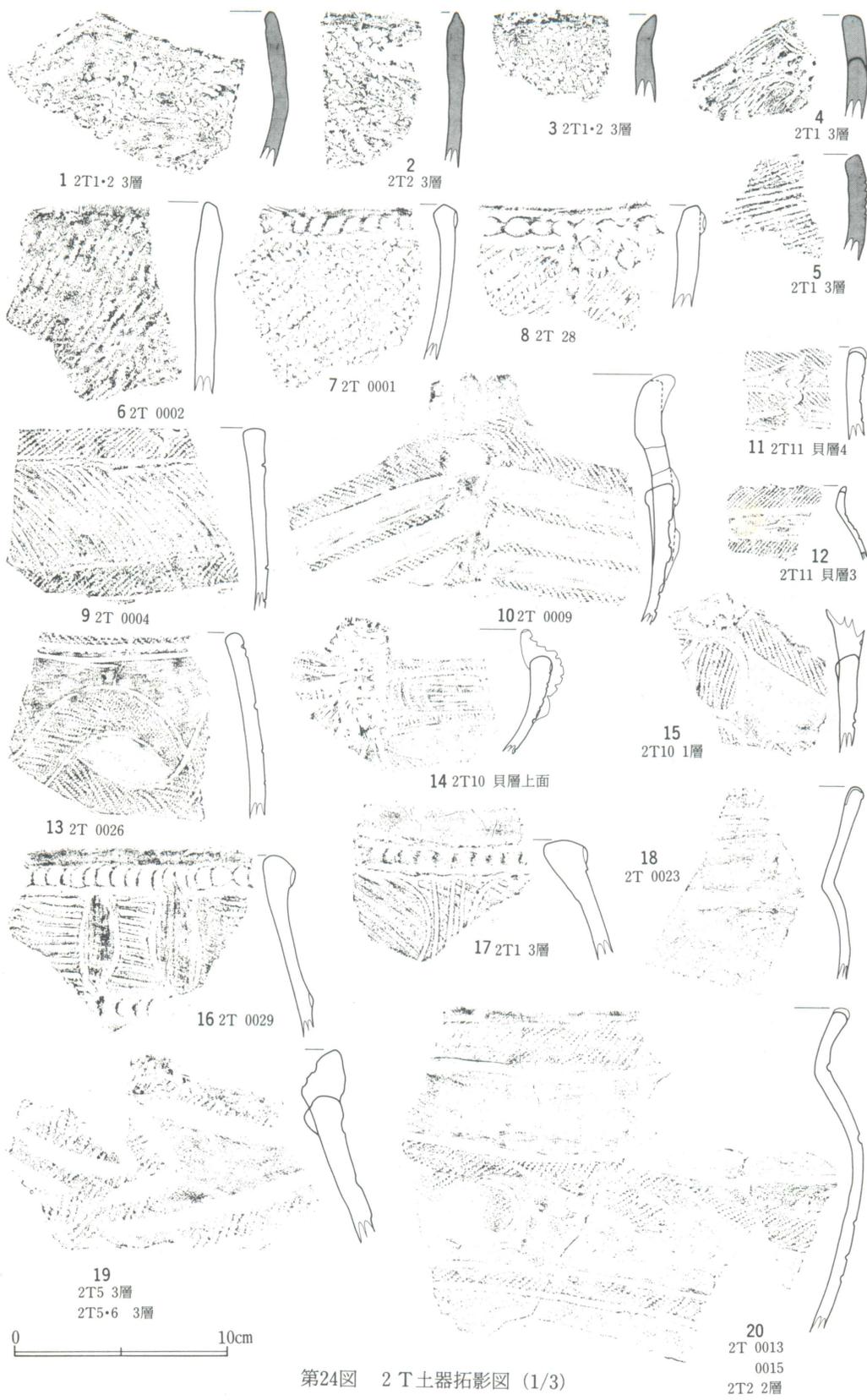
1~5は黒浜式の繊維土器である。1と4は波状口縁である。6は後期の堀ノ内式。7・8は加曾利B式の粗製深鉢。9は加曾利B式の精製深鉢。10は安行1式の大波状口縁精製深鉢。



第23図 1 T土製品・玉類・石器実測図 (1/2)

波頂部の下に丸い穴がある。11・12は貝層サンプル中の土器でともに安行3 a式。11は浅鉢であろう。口縁には半月形のその下には紡錘形の縄文区画が横に並ぶと思われる。12の外面の連続する三叉文の文様帯と内面はミガキである。13は安行1式と思われる精製深鉢。14は安行2式の精製碗。平縁に突起がつく。下の方に縄文区画がある。上下2本の刺突帯の下の方の下側に細かい列点がある。断定できないが、アナグラ属の貝の腹縁を押し付けてつけたようである。ナデで点がつぶれかけている。15は安行3 a式以降と思われる大波状口縁の精製深鉢。惜しいことに波頂部が取れて無い。16は安行2式の粗製深鉢。17もそうであろう。18は姥山II式と思われる無文の壺。口縁に縦に沈線をひく。内面は丁寧なナデであるのに対して、外面はヘラケズリである。20は姥山II式の典型的な壺。19は前浦式。波状口縁の精製深鉢であろう。

ここに掲げた土器でも分かるように2 T 1・2の3 A・3 B層は前期の土器が多く出土しているが、その他に後期・晩期の土器も伴出している。したがって、3 A・3 B層の貝集中の年



第24圖 2 T 土器拓影圖 (1/3)

代は前期とは決めがたい。また、B貝塚の一部と思われる2T7~11の貝層では、中からは11・12のような晩期前葉の土器が出土しているが、貝層の下の3C層からは19のような晩期中葉の土器さらに晩期後葉の千網式の土器も出土している。したがって、B貝塚は晩期後葉まで続いた可能性がある。

土器片利用円盤類 (第25図 1~5)

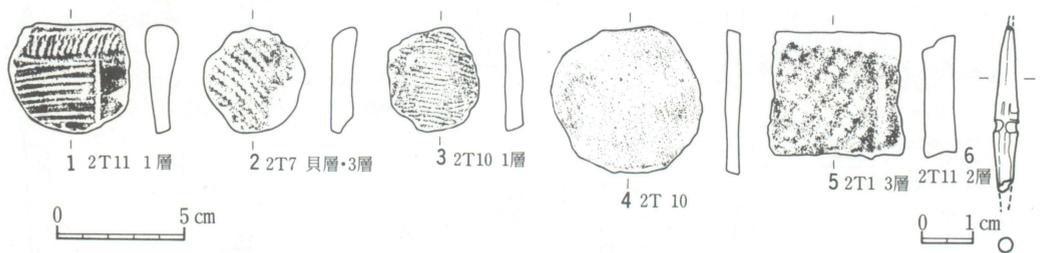
1は安行式の粗製深鉢の口縁、29.0g。2は胴部、17.9g。3も胴部、13.0g。4は安行式の粗製深鉢の胴部、22.5g。5は加曽利E式の胴部、磨耗がひどい。53.0g。

骨器 (第25図 6)

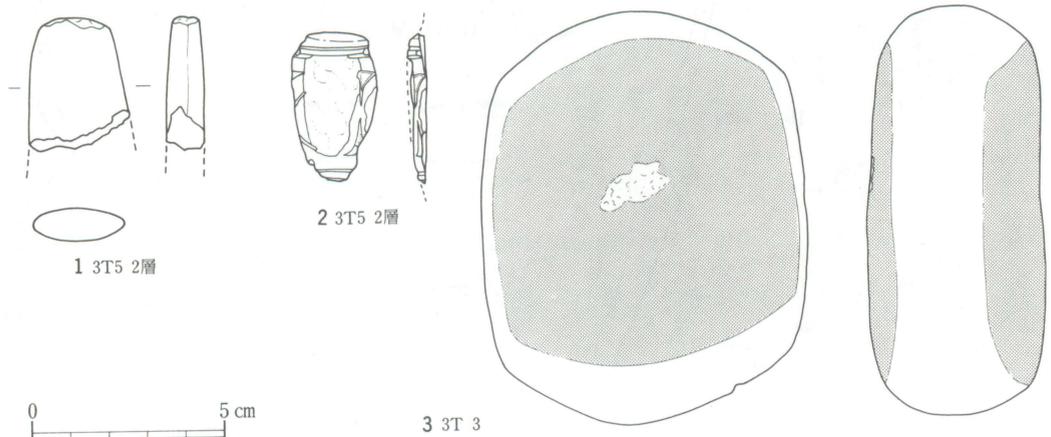
6はヤスカと思われる。最大径のところに溝が一周する。

石器

掲載しないが、チャート製の石鏃片2点、メノウ製の槍先片と思われるものと錐片と思われるものが各1点、欠けのある敲石2点、磨石片2点がある。



第25図 2T土器片利用円盤類・骨器実測図 (1/3・2/3)



第26図 3T石器実測図 (1/2)

3 T

土器

小破片ばかりで掲載しない。

石器 (第26図、図版15)

1は灰色に黒褐色斑の輝緑岩かと思われる石の石斧片、2は青灰色の石棒片、表面も剝落がある。3は淡灰色の安山岩製の敲石兼磨石、磨っている面の中央は敲きのひどいところ、705g。

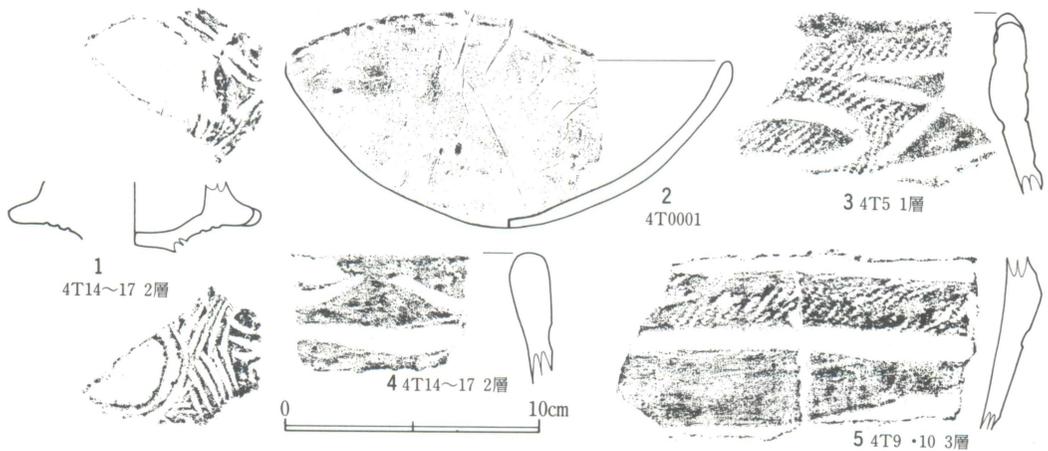
4 T

土器 (第27図)

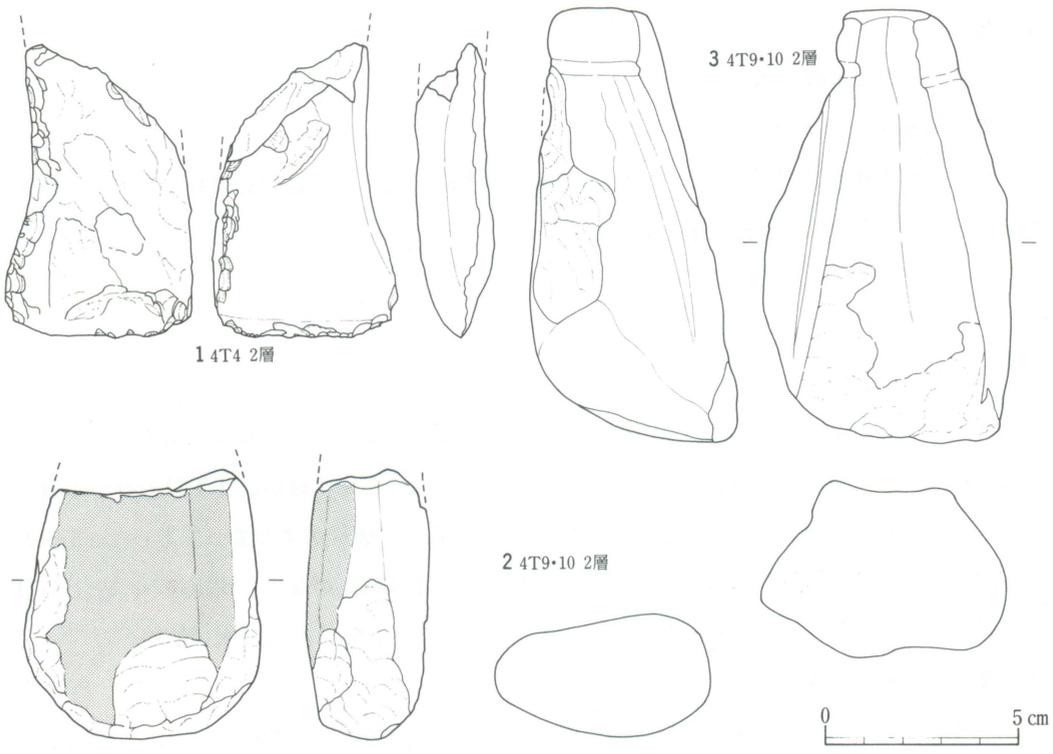
小破片がほとんどである。1は加曾利B式の香炉形土器。張りだした縁には刻みがつく。2は姥山II式の椀。無文。内外面ともナデであるが、内面はミガキに近い。4 T11のローム層上面、2 A層の堆積する凹みとの境近く、トレンチの北壁近くで破片がまとまってあった。3～5は前浦式。3は精製深鉢の口縁と思われる。波状口縁。4は縄文がなく、沈線のみ。左上の口縁の白い所は傷。5は浅鉢の胴部であろう。下側の左は横走、右は斜行の太い沈線。

石器 (第28図、図版15)

1は灰色の軟らかそうな安山岩製の石斧片、右の平面図の図示面は磨れている。2は灰色の砂岩製の敲石兼磨石片。3は灰色の砂岩製の砥石、紐をかけるためか、細くなった方に一周する刻みがある。この他チャート製の石鏃片1点、石斧片2点、敲石片4点などがある。



第27図 4 T土器拓影図 (1/3)



第28図 4 T石器実測図 (1/2)

V ま と め

1. 山武姥山貝塚の発見と発掘

山武姥山貝塚の発掘調査の経過については、慶応義塾大学の5回にわたる調査の後を承けて今回の確認調査を行ったことは、第2節で既に述べた。ここでは、慶応義塾大学の発掘調査に先立つ山武姥山貝塚の研究史を中心に述べる。

山武姥山貝塚の発見と学界への発表の経緯については、川戸彰氏が述べたものがある。それによると、山武姥山貝塚が知られるようになったのは戦後のことで、昭和23年頃に、遠山（貝塚の南側斜面下の集落が中心）在住の五木田広巖氏が、通学していた県立成東中学校の教諭清水浦次郎氏に譲った貝塚出土の遺物を、川戸氏が後日、見て、『上代文化』第20輯（昭和26年）誌上で発表するにあたり、遺物に出土地点を「遠山」と記してあったことから、出土場所を「遠山貝塚」として紹介したのが最初である。その後、酒詰仲男氏の『日本貝塚地名表』にも遠山貝塚の名で収録されている。その後、清水潤三氏の調査で正しい地籍名が求められ、姥山貝塚と命名し直された、ということである（川戸ほか 昭和50年・43頁）。

なお、貝塚の発見者の名前としては、清水潤三氏は、清水浦次郎と鎗田欣治の二氏の名を記す（清水 昭和33年・198頁の表）。

貝塚は、遠山貝塚として知られるようになったものの、慶応義塾大学の発掘調査まで、調査されることもなく過ぎたのである。慶応義塾大学の発掘調査は、昭和31年春、34年春、35年夏、38年夏、42年夏に行われた。昭和42年秋には地形図の測量が行われて、慶応の調査は終わっている。その成果については、第2節と本節の第2項で述べる通りである。

貝塚の名称については、姥山貝塚から山武姥山貝塚への変更ということがある。市川市の姥山貝塚との混同を避ける意味で「山武姥山貝塚」を提唱したのは、鈴木公雄氏である（鈴木 昭和38年・註1）。

また、Z貝塚については、第1回の調査の報文では、貝塚とすることに疑問を呈しながらも貝塚とするが（清水 昭和36年・75頁）、第2回の調査の報文ではZ地点と呼び換え（清水 昭和39年・81頁）、第3回の調査の報文からは貝塚とは別に「姥山遺跡」としている（清水 昭和40年・110頁、鈴木 昭和43年、藤村 昭和47年）。

2. 既応の調査及び今回の調査の成果

第2節でその内容と成果について既に触れた慶応義塾大学のA貝塚・C貝塚・Z貝塚についての5回の発掘調査の、成果として発表されている事柄と、今回の調査で得られた知見をまとめるとつぎのようになる。

地点貝塚群の環の内側には、今回の4Tの成果から遺構の無いところがあると思われる。た

だし、全く無いかと言えば、今回行った表面観察では4 Tよりも南側の畑一帯では土器が目立つので遺構のある可能性がある。

各地点貝塚の様子は、まず、A貝塚は、慶応の調査では道の東側の貝塚ほぼ中央を発掘しているが、縄文中期（阿玉台式・加曽利E式）の貝塚で、厚さ50～60cmの混土貝層があり、貝は小形のチョウセンハマグリを主としアサリがほぼ等量でそれにダンベイキサゴが次ぎ、かなり広範囲にシジミとダンベイキサゴから成る層がある。石器、骨角器は出土が少ない。獣骨・魚骨も平均的な出土量でシカとイノシシが最も多いことが明かになっている（清水 昭和33年・208頁）。

B貝塚は、今回の調査が最初の調査であるが、貝塚のへりであるが、2 Tで貝塚の下の層から千網式の土器が出土したので、その年代は晩期後葉まで下る可能性があると見ておくべきであろう。清水潤三氏は、B貝塚の年代について縄文後期後半から晩期前半と推定している（清水 昭和50年・11頁）。B貝塚についてはまた、今回の調査の所見からすると、慶応の調査ではこれと別の貝塚とするW貝塚と一体のものと思われた。B貝塚は、ごく小規模に採取しただけであるが、今回の貝層サンプルによれば、貝は、A貝塚に似て、チョウセンハマグリとダンベイキサゴが多いようである。獣骨は多く、イノシシがみられ、魚骨も多く、貝が海水性主体であるのに対して、魚はウナギ・フナ属という淡水性のものが多いようである。石器は少なく、骨角器も1点しか出土しなかった。

C貝塚は、慶応の調査では貝塚でも南側にあたる上部を発掘しているが、縄文中期～後期（阿玉台式・加曽利E式・堀ノ内式・加曽利B式）の貝塚であることが確かめられ、典型的と思われる土層断面では阿玉台式の層はダンベイキサゴが主で、加曽利E式の層と堀ノ内式の層とともに、小形のチョウセンハマグリを主とし、ダンベイキサゴ、大形カキ、ハマグリなどが多く、最上層にはシジミが現れることが観察されている。加曽利B式の貝層は貝塚の上記の土層断面が得られた地点のすぐそばで堀ノ内式主体の層の上に見つかっている。この加曽利B式の貝層は、下の堀ノ内式の貝層とともにチョウセンハマグリが主体である。C貝塚全体に堀ノ内式と加曽利B式の貝層にヤマトシジミが現れている。石器は少なく、骨角器、玉類も出土した。獣骨は大量に出土し、シカ・イノシシを主体とし、タヌキ・アナグマ・ウサギもある。魚骨は多くないが、外洋性の種に乏しいのは確実とする（清水 昭和33年・209～211頁）。

Z貝塚（地点）は、慶応の調査でそのほぼ全体を発掘しているが、貝層の存在は確認されているものの、貝塚はみつかっていない。縄文後期の安行式から晩期の安行式から荒海式までの土器の包含層、焼土層の存在が明かになっている。この地点の発掘成果をもとに姥山式が提唱されている（鈴木 昭和38年）。A貝塚との関係は、A貝塚から加曽利E式に堀ノ内式が混じる貝層は斜面に延びて漸次消滅する。それに代って後期安行式の黒褐色土層（貝少量混）が始まる。そのあたりからさらに斜面の下側になると、この層の上に晩期の土器の層が重なり合っ

堆積する（鈴木 昭和40年・109頁）。貝層の形成は姥山II式までであるとする（鈴木 昭和43年・90頁）。焼土層は荒海式に伴うもので、廃棄されたものであるとする（藤村 昭和47年・103頁）。石器、骨角器なども出土している。シカ・イノシシの骨が多いことは、慶応の調査の報文全てが記す。今回のZ地点南側に設定した1Tの調査成果から、縄文晩期の包含層はZ地点よりも南側に続いて広がることがわかった。また、今回のイ貝塚の露出の確認によって、貝塚の存在が明かになった。

この他のW・X・Yの地点貝塚については、慶応の調査は無く、その調査の報文中に説明も無い。今回も位置と範囲の確認だけで、発掘調査は行わなかった。ア・イの貝塚は慶応の調査以後に存在が明かになったものである。また、今回の調査時に気づいた貝散布地点が3箇所ある。さらに、2TでB貝塚の北側の谷の中深くに前期の黒浜式期である可能性もあるハイガイ・ハマグリ・マガキを主体とする貝集中が見つかった。ハイガイが多い点、B貝塚ともA貝塚・C貝塚とも貝の組成を異にするので注目される。ハイガイは、Z貝塚のハマグリとダンベイキサゴを多く含む貝層に混じっているのが確認されている（清水 昭和33年・211頁）。

地点貝塚の環の外側については、今回A貝塚の西側、Z貝塚の南側にあたることを1Tで調査したところ、晩期の住居跡が2つ見つかった。今回の調査時の所見では、土器の密に散布するところは、地点貝塚の環の外側全体に広がっている。その範囲は、山林内は確認不能であるが、1Tの西側は山林との境まで、2Tの西側の谷の中はビニールハウスの西の段まで、3Tを設定した谷の中は3Tの西の道から東へC貝塚の下段まで、Y貝塚の一带は、南側の山林との境までである。4Tのあたりは土器の散布はまばらである。

3. 貝塚の現状

全般的には、山武姥山貝塚は保存状態が良い。畑の耕作の影響が及んでいるのは貝塚と包含層のごく上の方だけである。各地点貝塚を見てみると、A貝塚は、慶応の調査でも指摘されているように（清水 昭和33年・208頁）、道の部分が破壊されていることが推測される。B貝塚は、慶応の調査時は厚い土に覆われていたということであるが（清水 昭和50年・11頁）、今回ボーリングしたところでは、そのようではなかった。また、畑の表面にかなり貝が散っていた。台地の上なので土が流れたのであろうか。C貝塚は、慶応の調査でも指摘されているように（清水 昭和50年・11頁）、下を走る道をつくる時に削られている。さらに、斜面にかかっているので、雨水による崩落が進んでいる。ただ、上の方は、今回のボーリングの結果では厚い土に覆われて良くのこっているようである。W貝塚とX貝塚は、保存状態が良い。Y貝塚は、今回ボーリングしたところでは貝層には当たらず、貝の散布がみられるだけで、痕跡をとどめるだけであった。Z貝塚（地点）は、慶応の調査時には土中であって気が付かれなかったイ貝塚が、今回の調査時には露出していた。これは土の流出のせいであろうか。

4. 貝塚の範囲と内容

山武姥山貝塚の範囲を考えるにあたっては、地点貝塚の環の部分だけを考えるのでは不十分であることは、慶応義塾大学の調査の成果及び今回の調査の成果の示唆するところである。山武姥山貝塚は、A貝塚・B貝塚・C貝塚などから成る地点貝塚の環とその内側に加えて、地点貝塚の環の北側の谷を埋めた地表からは窺えない地点貝塚を含むZ地点を代表とする分厚く広範囲な遺物包蔵地、同じく西側の台地上に広がる縄文晩期の集落跡を合わせてひとつの遺跡としてみなければいけない。山武姥山貝塚は、慶応義塾大学の調査では、Z地点の縄文晩期の土器包蔵地の発掘に重点が置かれた結果、遺跡全体としての構造の解明はあまりなされていない。清水潤三氏に貝塚の形成過程と集団関係についての若干の考察があるにとどまる（清水 昭和50年・11～12頁）。今回の調査からは、地点貝塚の環そのもののみならず、その外側にも貝塚に劣らぬ豊富な考古資料の埋蔵することが窺えるのであって、山武姥山貝塚について考える上で、これらを見捨てることはできない。

山武姥山貝塚の内容は、地点貝塚、遺物包含層、集落跡から成ることが、慶応義塾大学の調査と今回の調査で明かである。地点貝塚の形成は縄文中期にA貝塚とC貝塚から始まったと思われるが、今回の調査で2Tの北部分の3層中にみつかった貝集中は前期に遡る可能性もある。A貝塚は中期で終わるが、C貝塚は後期末まで続く。B貝塚は晩期に形成されたと思われる。その他の小さな地点貝塚の年代はわからない。晩期以前については不明であるが、晩期には貝塚の北側の谷へ大量の土器、獣骨などが棄てられている。その跡の一部がZ地点である。こうした地点貝塚と遺物包含層を作り出した人々は、貝塚の中か周辺に住んでいたと思われるが、中期・後期の集落跡は所在が不明である。晩期の集落跡は、今回の調査で貝塚の西側にみつかった。集落跡は他に地点貝塚の環の中の南側部分にもあるのではないかと思われる。地点貝塚の環の中の北側部分、4Tのあたりは地表から浅いところに粘土層があるために水はけが悪い。また、表面観察の結果では土器の散布がまばらである。したがって、集落跡は無いと思われる。平らではあるので、作業場にはなったであろう。4Tの一带の積極的な利用法としては、さして掘ることなく粘土層に達することができることから、土器つくりのための粘土採掘場所ということが想定できる。しかし、今回の調査では粘土採掘の痕を確認してはいない。

山武姥山貝塚については以上であるが、今回の確認調査の際、たまたま貝塚の東側の斜面下に住んでいられる芹川家の方から、貝塚の東側の斜面あたりに古く寺があったという話を聞いたことがあるということを知り、本人が東側の斜面で掘り出したという板碑片を見せて頂き、撮影した。山武姥山貝塚のそばに寺があったという言い伝えは、あまり知られていないようであるので、簡単であるがここに記しておく。

文 献

山武姥山貝塚に関するもの

- 清水潤三「千葉県山武郡姥山(台)貝塚」『日本考古学年報』9-1956年度分一、昭和36年
同 上「千葉県山武郡姥山・台貝塚」『日本考古学年報』12-1959年度分一、昭和39年
同 上「千葉県山武郡姥山遺跡」『日本考古学年報』13-1960年度分一、昭和40年
鈴木公雄「千葉県山武郡姥山遺跡」『日本考古学年報』16-1963年度分一、昭和43年
藤村東男「千葉県山武郡姥山遺跡(第五次調査)」『日本考古学年報』20-1967年度分一、昭和47年

清水潤三「千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研究(予報)」『史学』第31巻第1-4号、昭和33年

同 上「横芝町の古代文化」『横芝町史』-特別寄稿篇-昭和50年

川戸彰ほか『横芝町史』昭和50年

姥山式土器に関するもの

鈴木公雄「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器について」『史学』第36巻第1号、昭和38年

同 上「姥山II式土器に関する二、三の問題」『史学』第37巻第1号、昭和39年

同 上「千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』第38巻第1号、昭和40年

同 上「再び真福寺泥炭層出土の土器について」『史学』第50巻記念号、第51巻1・2号、昭和55年、56年

同 上「関東地方」『縄文土器大成』第4巻、昭和56年

同 上「多古田泥炭層遺跡」(第2章第5節)『八日市場市史』昭和57年

版 圖 真 寫



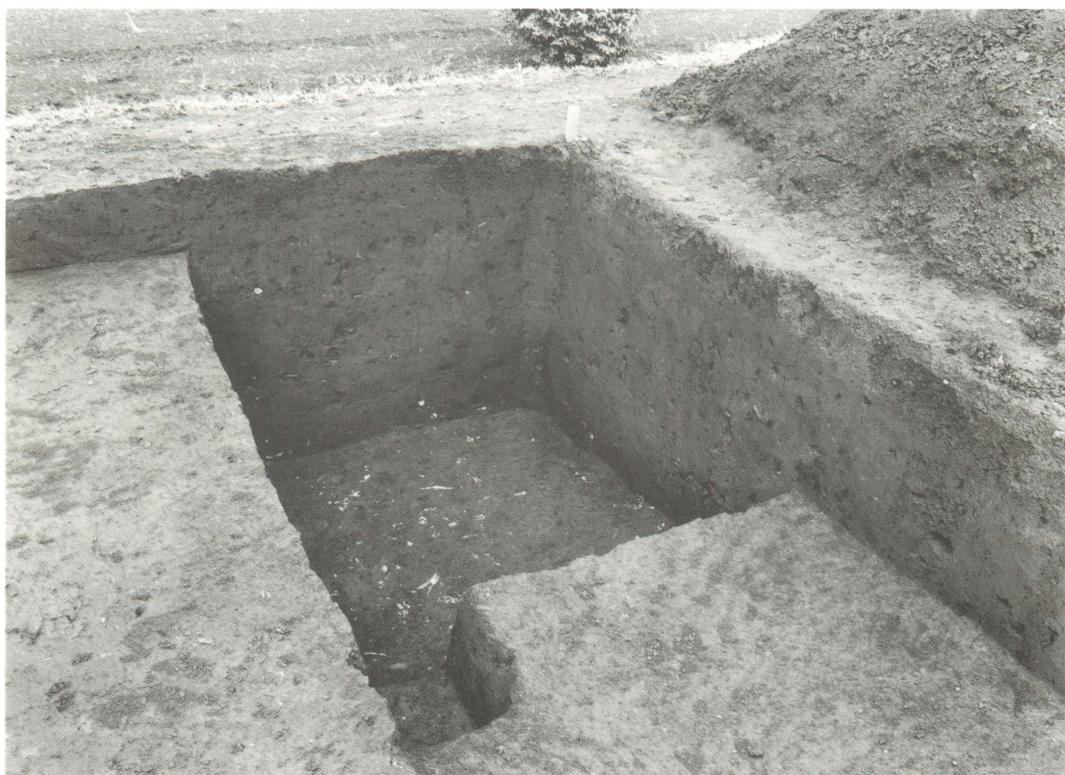
1. 貝塚の所在する台地（東から）



2. 貝塚遠景（北東から）



1. 1T全景（北から）



2. 1T1の3層上面（南西から）



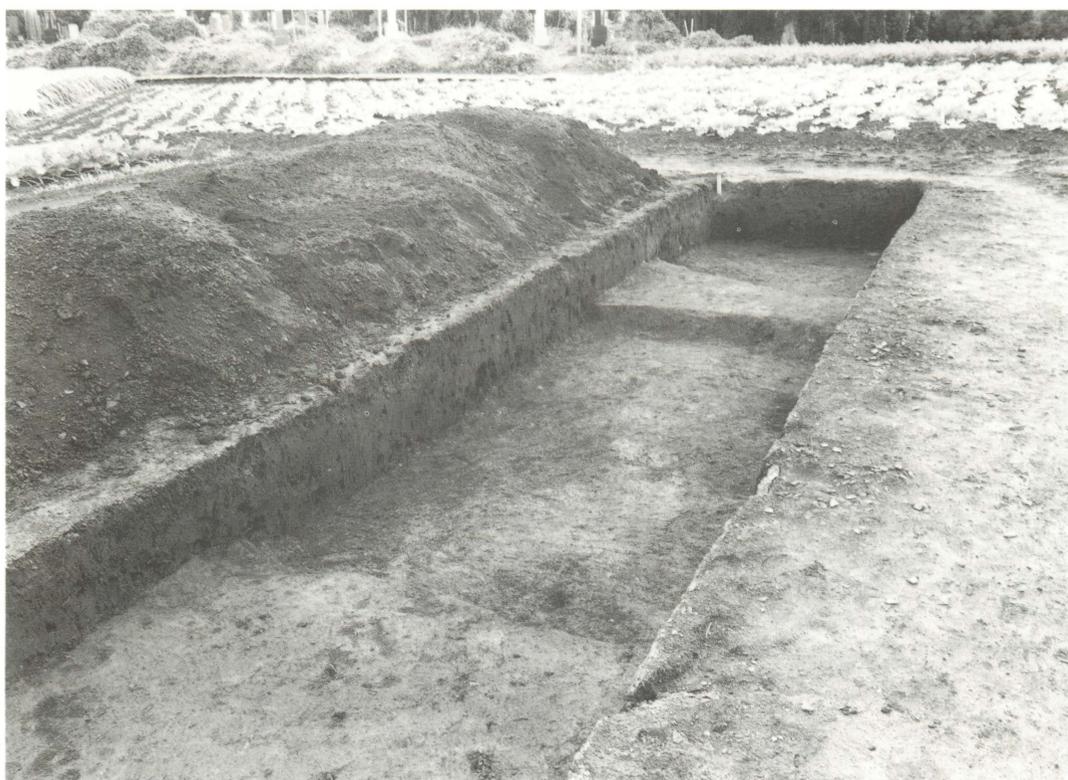
1. 1T-A遺物出土状況（北から）



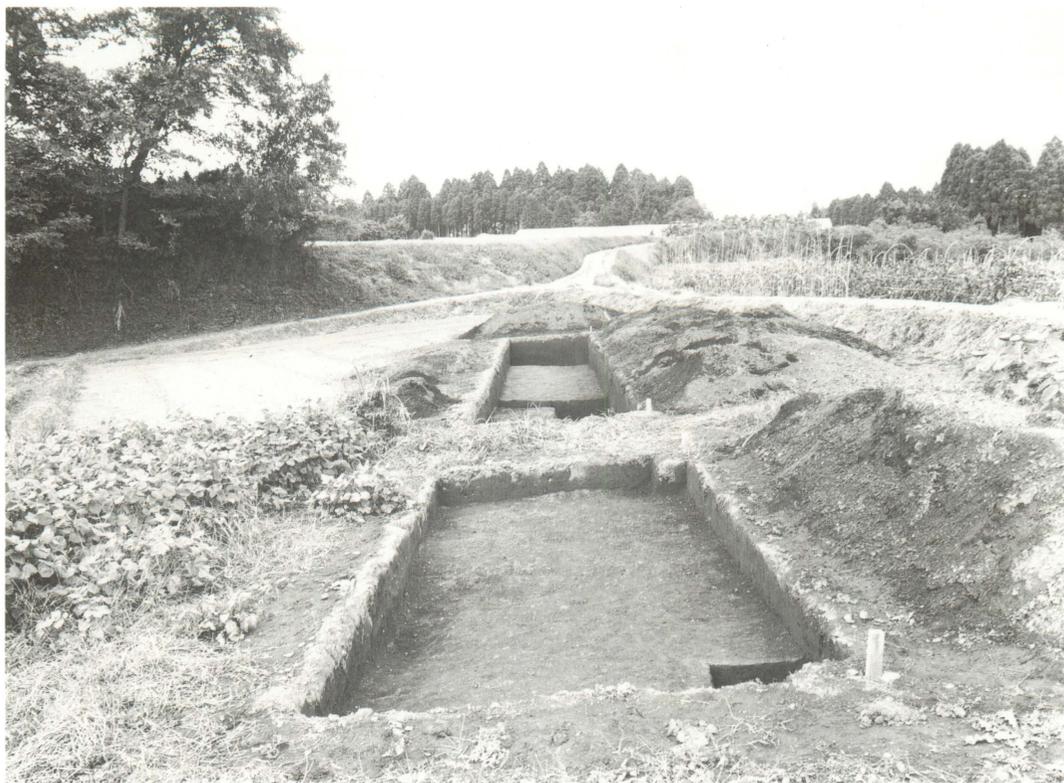
2. 1T-A掘上がり全景（北から）



1. 1T-B遺物出土状況（北から）



2. 1T-B掘上がり全景（北から）



1. 2 T 全景 (南から)



2. 2 T 1・2 の 3 層中貝集中 (南西から)



1. 3 T 全景 (南東から)



2. 3 T 土坑掘上がり全景 (南から)



1. 4T1～7 (南西から)



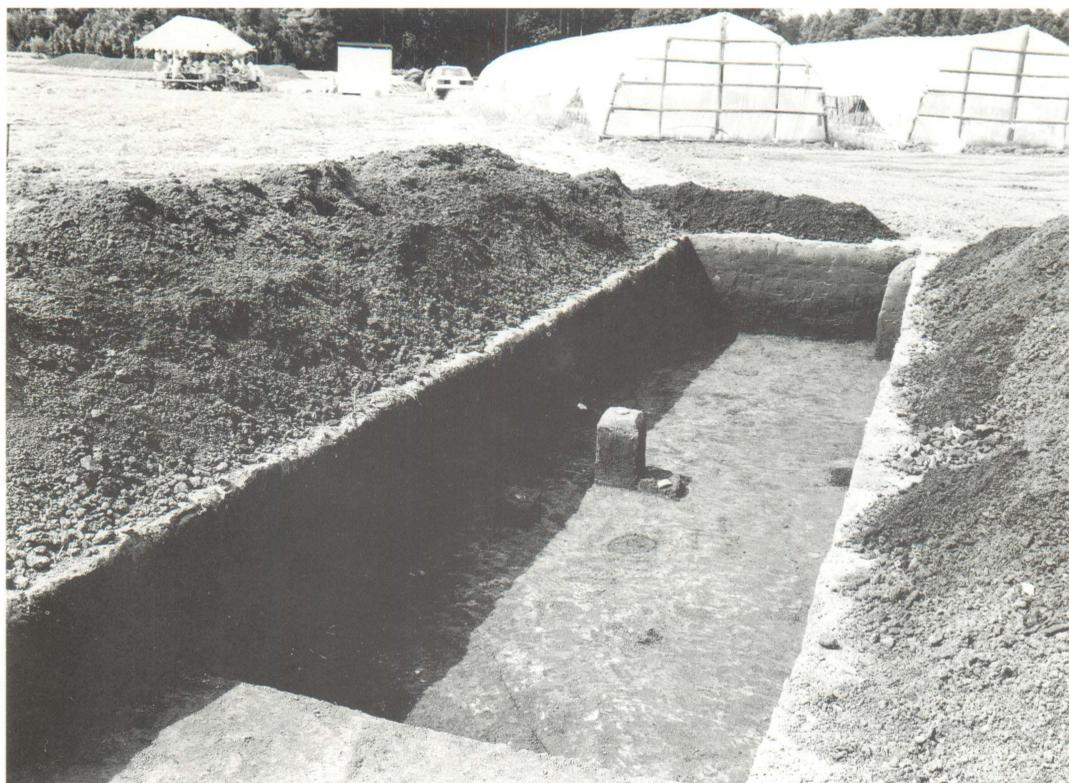
2. 4T7～13 (北西から)



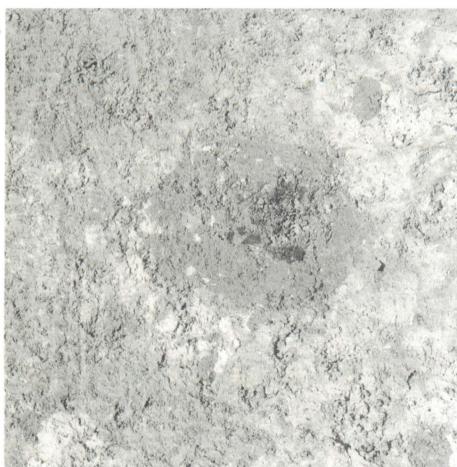
1. 4 T14~20 (東から)



2. 4 T20~26 (北東から)



1. 4 Tの柱穴列（東から）



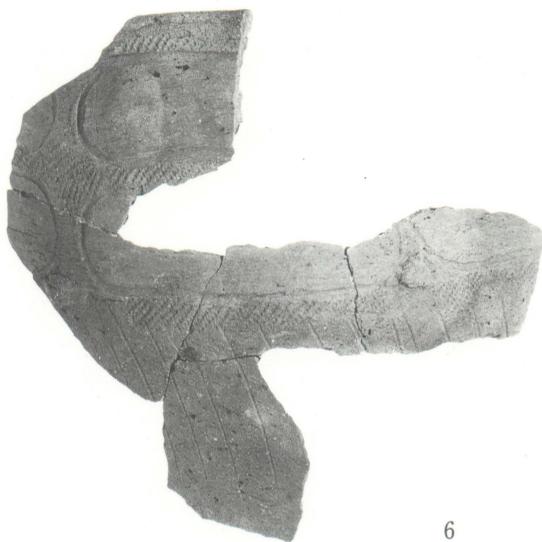
2. 4 T柱穴列の炭化柱（東から）



3. 貝塚説明板（北西から）



1T-A 1



6



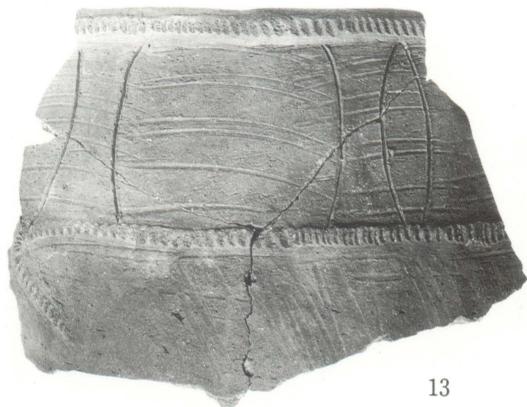
8



9



12



13



20



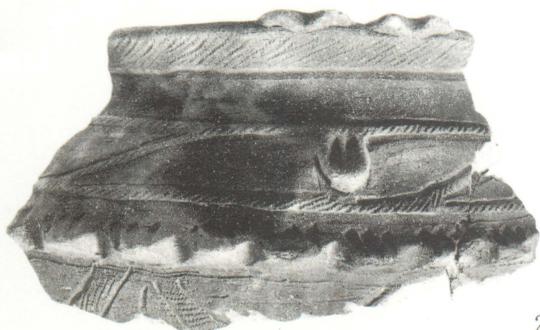
24



25



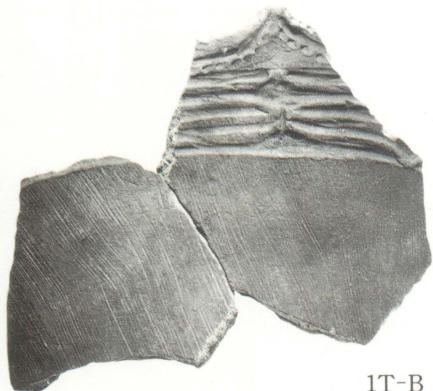
27



28



32



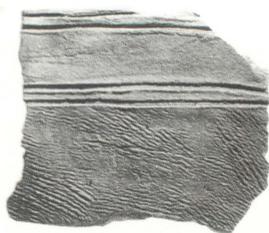
1T-B 1



8



9



12



13



16



19



27



36



39



1T 14



11



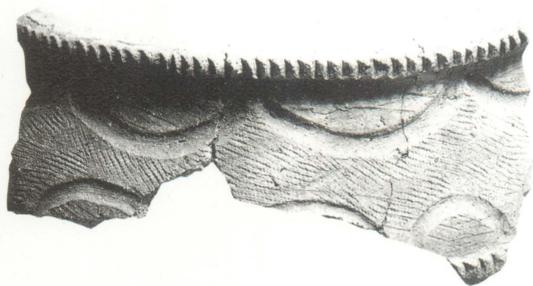
11



20



22



23



24



33



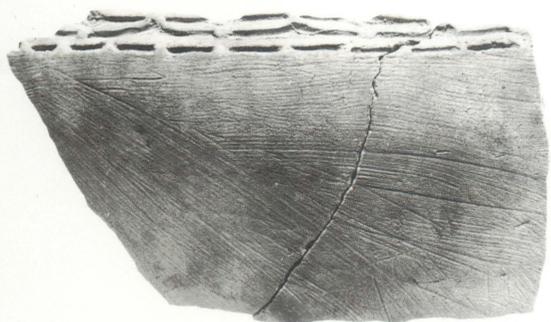
34



43



47



50



53



60



64



2T 10



20



1T-A 1



1T 2



1T-B 3



1T-B 4



1T 4



1T 3



1T-A 2



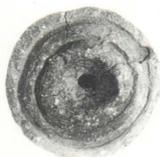
1T-B 5



1T-B 6



1T-B 7



1T-A 4



1T 10



4T 1



1T-B 8



1T-B 9



1T-B 12



1T-B 11



1T 9

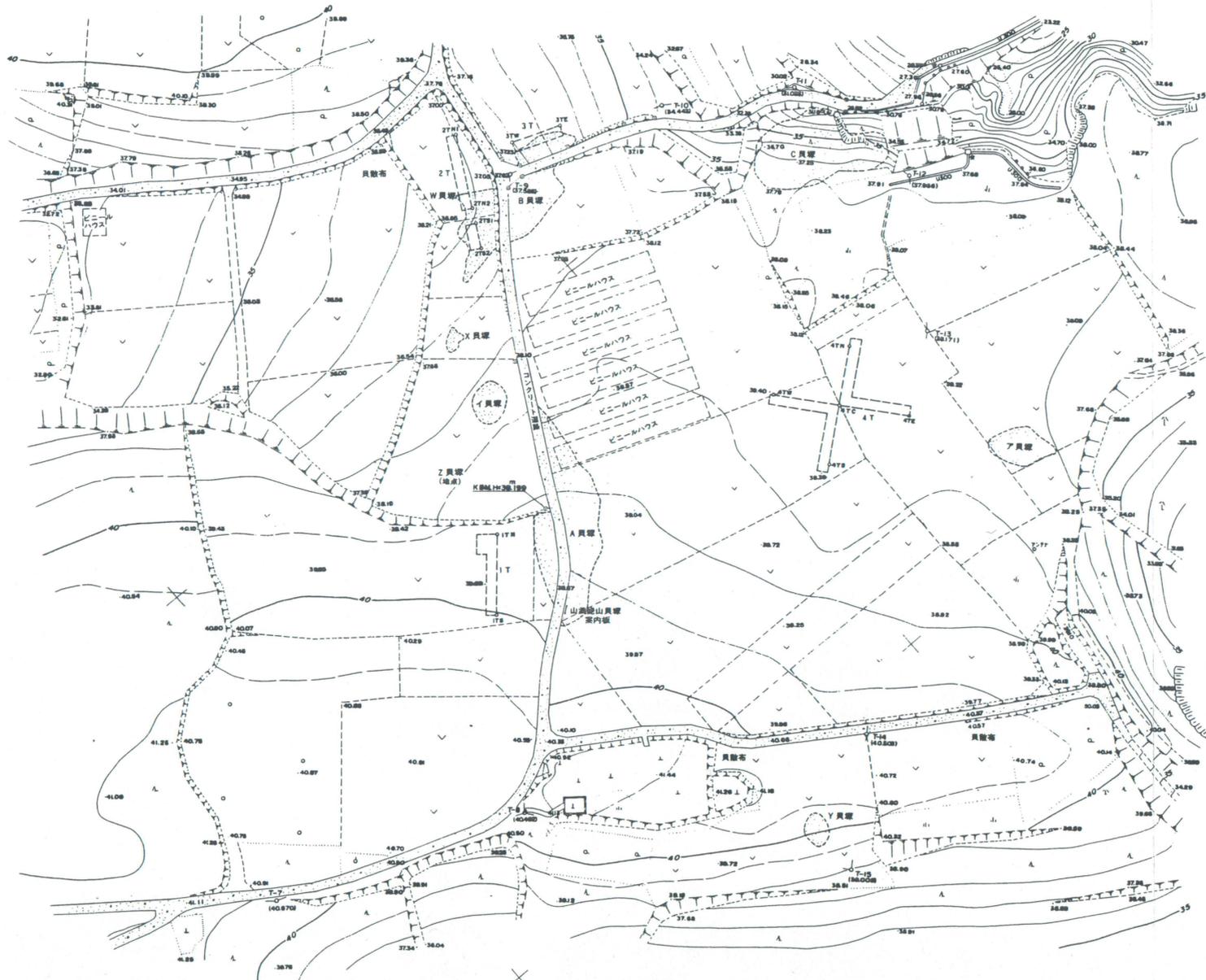


3T 3



4T 3

県内主要貝塚(山武姥山貝塚)地形図 S = 1 : 1000



凡 例	
○ T-1	多 角 点
□	境 界 石 杭
┌───┐	ト レ ン チ
○	貝 塚
▬	コ ン ク リ ー ト タ タ キ
▬	U 200
▬	U 製 備 溝
▬	ブ ロ ッ ク 溝
▬	コ ン ク リ ー ト 被 覆
▬	土 止 め
▬	法 麗
▬	崩 土
△	針 葉 樹
○	広 葉 樹
▽	畑
山	荒 地
竹	竹 林
上	藪 地
○	果 樹 園
○	植 木 畑
▬	等 高 線
○	標 高 点
▬	地 理 界
▬	耕 地 界

千葉県文化財センター調査報告第187集
横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書

平成2年3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県葛城2丁目10番1号
印刷 株式会社 弘文社

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。